

王 祥 · 麻 生 路 郎

川柳雜誌

大正十三年三月三日發售三樓郵便所
昭和七年十二月一日發行(毎日一圓一日發行)

第九卷 第十二號
川柳雜誌社發行



第九卷
十二月號

京阪神 支部聯合 忘年句會

恒例に依り本社後援の下に京阪神支部聯合句會を開催することになりました。句會は川柳作家が一堂に會すると云ふ歡びばかりではなく、創作向上に對するよき刺激を相互の胸に感受し得る歡びの源泉でもあります。川柳家諸氏は舉つて御出席下さい。同時に川柳の道に一步を踏み出さうと思はれる方々の御出席を歓迎の念を以てお待ち致します。

◇日時 十二月四日(日曜)

(午後六時)

◇會場 ちとせ俱樂部

大阪市南區千年町(市電日本橋停留場西辻北入)

◇兼題

大晦日 三句 路 郎選

巾着 三句 琴 人選

出帆 三句 綠 雨選

◇會費 金三十拾錢 麻生路郎

▽兼題及席題各三光五客に呈賞 (但出席者に限る)

(出席者全部粗品呈)

大阪市南區疊屋町周防町東入

カナメ喫茶店內

主催 支部聯合會事務所
後援 川柳雜誌社

川柳雜誌 第九卷第十二號目次

文苑

さぼは笑ふ 麻生路郎(二)

武玉川初篇研究(七) 森本秋農屋 蛭子省二(魚三〇)

柳の絮(完) 長野吉高(三〇)

機械の眼 松丘町二(四三)

地 下 武玉川初篇研究補記 蛭子省二(三三)

柳の絮のことども 長野吉高(三)

鐵 全集を待つ 欣愚生(四)

叔父 路郎生(五)

創作

近作柳樽 麻生路郎選(四)

川柳塔 同人・社友(六)

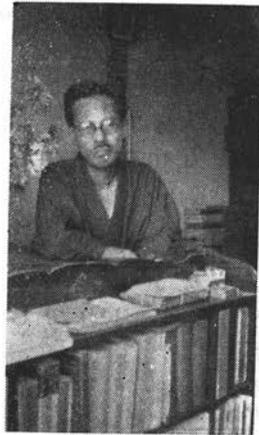
光耀抄 麻生霞乃選(三〇)
粒々集 諸家(二六)
各地柳壇 (四)

一路集 (課題吟)

懷手 關本雅幽選(三五)
情熱 中澤濁水選(三八)
水谷鮎美選(四)

飛燕往來 (四)
編輯の窓 山雨樓空
西之町MEMO 綠雨(三)

題字 十錢漫畫(表紙) 梅田呑吸
麻生路郎



さぼは笑ふ

麻 生 路 郎

街の詩人

昨年の歳末に私は

十二月うれしい風も少し吹け

の句を發表した。その十二月がまた巡つて来たが一向うれしい風が吹きさうにもない。退職に次ぐに貧乏、貧乏に次ぐに病苦、病苦に次ぐに貧乏で、徒らに詩人のところを傷けて行くばかりである。

だけど、だけど私は云ひたい。傷けば傷くほど、虐げられれば虐げられるほど詩の世界に執着を感じないではゐられない。

今の世は詩人でなくても住み難いのだ百姓でさへ土にしがみついて暮らしかね

てゐるのだ。今更詩の世界が住み難いからとて、どうして田が作れやう。例令詩人の干物が出来たとて、田の中で麻胡々々するより幾らか慰められようといふものだ。

私はこんなことを考へながら、大阪といふ灰色の街に住みつゞけてゐる。

蘆村と命日

十一月十四日は岳父河盛蘆村翁の三回忌にあたるが、貧しさの中に喘いでゐる私たち親子は、親戚や知人に知らずでもなくそれらしい準備もせずその日を迎へた。

朝からパラ／＼と時雨れてゐてなんだ

か憂鬱な日だった。けれども故翁を偲ぶ私たち夫妻と、生前慈しんでいた孫たちは、翁と翁の亡妻との寫眞が淋しく飾られた佛壇の前に押し列んだ。鹽で徳乗寺さんの早口の讀經がはじまつた。讀經の切れ間／＼に一同はなむあみだぶつを稱へながらしみ／＼としたお祈りをさ／＼げた。

蘆村翁六十餘年の生涯は所謂忍苦の活歴史であつた。早く愛妻を喪はれた翁は乃木さん以上の孤獨さで後半生を過ごされた。

翁の日常は聖者の生活であつた。私たち親子に對しても、殊に自分の實子である愚妻に對しても頗ぶる寛大であつた。

百宗旨の如きも猶終始一貫して神道を奉じてあり、猶ほが遺妻は幼時が、（キヤルスト）教の信者であり、私の家は真宗であつた。行かないだらう。

「お祖母が、お茶やお菓子で、お祖父さんを慰ぶさ、やかな句會を開いた。」

「句會や〜」と云つてアトヤリが一等うれしがつた。リリは一寸首を上げて考へてゐたが、「お祖父さんの句でなうてもエ、のン？」と聞く。

なるほど思ひ出の句は大人でも難しい「何んでもかまへん」と云へば「さう」と云つて、すぐに四句作つた。リリが一番スピーディーである。ところが何れも巧みではあつたが貧乏川柳ばかりだつたので、みんなが聲を上げて笑つた。

アトは今日も又ふところにある輕節といふ句を作つた。これはお祖父ちゃんと思ひ出の句であつた。奈那だけは文字があつても詩才がないので「作られへん〜」と云つて妹や弟に降参してしまつた。自ら詩才がないと云つてゐる純子までが作つた。

十一月十四日は翁の亡き愛妻の祥月命日である。翁の希望は期せずして、的申して同月同日に亡くなられたのであつたが、これは必ずしも経費節約のそればかりではなかつた。翁はその生前、月の十四日にはどんな理由があらうとも一心寺への参詣を怠らなかつた。勤務からの戻りに一本の香筆を携えて一心寺を訪れ亡妻の冥福を祈つてゐられた。さうした點か

「お祖母が、お茶やお菓子で、お祖父さんを慰ぶさ、やかな句會を開いた。」

「句會や〜」と云つてアトヤリが一等うれしがつた。リリは一寸首を上げて考へてゐたが、「お祖父さんの句でなうてもエ、のン？」と聞く。

「お祖母が、お茶やお菓子で、お祖父さんを慰ぶさ、やかな句會を開いた。」

「句會や〜」と云つてアトヤリが一等うれしがつた。リリは一寸首を上げて考へてゐたが、「お祖父さんの句でなうてもエ、のン？」と聞く。

なるほど思ひ出の句は大人でも難しい「何んでもかまへん」と云へば「さう」と云つて、すぐに四句作つた。リリが一番スピーディーである。ところが何れも巧みではあつたが貧乏川柳ばかりだつたので、みんなが聲を上げて笑つた。

アトは今日も又ふところにある輕節といふ句を作つた。これはお祖父ちゃんと思ひ出の句であつた。奈那だけは文字があつても詩才がないので「作られへん〜」と云つて妹や弟に降参してしまつた。自ら詩才がないと云つてゐる純子までが作つた。

十一月十四日は翁の亡き愛妻の祥月命日である。翁の希望は期せずして、的申して同月同日に亡くなられたのであつたが、これは必ずしも経費節約のそればかりではなかつた。翁はその生前、月の十四日にはどんな理由があらうとも一心寺への参詣を怠らなかつた。勤務からの戻りに一本の香筆を携えて一心寺を訪れ亡妻の冥福を祈つてゐられた。さうした點か

「お祖母が、お茶やお菓子で、お祖父さんを慰ぶさ、やかな句會を開いた。」

「句會や〜」と云つてアトヤリが一等うれしがつた。リリは一寸首を上げて考へてゐたが、「お祖父さんの句でなうてもエ、のン？」と聞く。

なるほど思ひ出の句は大人でも難しい「何んでもかまへん」と云へば「さう」と云つて、すぐに四句作つた。リリが一番スピーディーである。ところが何れも巧みではあつたが貧乏川柳ばかりだつたので、みんなが聲を上げて笑つた。

「お祖母が、お茶やお菓子で、お祖父さんを慰ぶさ、やかな句會を開いた。」

「句會や〜」と云つてアトヤリが一等うれしがつた。リリは一寸首を上げて考へてゐたが、「お祖父さんの句でなうてもエ、のン？」と聞く。

なるほど思ひ出の句は大人でも難しい「何んでもかまへん」と云へば「さう」と云つて、すぐに四句作つた。リリが一番スピーディーである。ところが何れも巧みではあつたが貧乏川柳ばかりだつたので、みんなが聲を上げて笑つた。

アトは今日も又ふところにある輕節といふ句を作つた。これはお祖父ちゃんと思ひ出の句であつた。奈那だけは文字があつても詩才がないので「作られへん〜」と云つて妹や弟に降参してしまつた。自ら詩才がないと云つてゐる純子までが作つた。

十一月十四日は翁の亡き愛妻の祥月命日である。翁の希望は期せずして、的申して同月同日に亡くなられたのであつたが、これは必ずしも経費節約のそればかりではなかつた。翁はその生前、月の十四日にはどんな理由があらうとも一心寺への参詣を怠らなかつた。勤務からの戻りに一本の香筆を携えて一心寺を訪れ亡妻の冥福を祈つてゐられた。さうした點か

「お祖母が、お茶やお菓子で、お祖父さんを慰ぶさ、やかな句會を開いた。」

「句會や〜」と云つてアトヤリが一等うれしがつた。リリは一寸首を上げて考へてゐたが、「お祖父さんの句でなうてもエ、のン？」と聞く。

なるほど思ひ出の句は大人でも難しい「何んでもかまへん」と云へば「さう」と云つて、すぐに四句作つた。リリが一番スピーディーである。ところが何れも巧みではあつたが貧乏川柳ばかりだつたので、みんなが聲を上げて笑つた。

斯くて俳句や川柳を多年黙々として作つてゐられたさびしいお祖父さんにふさはしい句會の一日が終つた。

讀書雜誌を讀む

十月廿日の夜、北濱の旗亭野田屋に於て關西日報主筆高梨光司君の記者生活二十年の祝賀會があつた。私も席末を汚した一人であるが、その際君の近業「讀書雜誌續篇」一部を惠ぐまれた。

席上、谷本富博士が立つて、私は學者で操觚者であるが高梨君は操觚者で學者である。由來操觚者に學者は少ないが、土屋大夢翁に次ぐ學者であらう。この本なごも、に列席されてゐる諸君には、讀めない字があるだらうと、眞砂甲からふりかざした提灯の持ち方であつた。讀んでゐるうちになるほど讀めない字があつた。尤も私一人が讀めないのかも知れないが、讀めないことは確かだつた。博士の高壓的な風呂敷には反感を持つが、嘘はつかれなかつた。高梨君の學者であることには私としても異論はない。關西操觚界に於て徳富蘇峯、故土屋大夢翁の鶴學の士をもとるとすれば、眞實な自分は必ず編長竹亭者に、高梨望岳樓兄の名を併記するであらう。要するに

「讀書雜誌續篇」は君が研讀の餘瀝に過ぎないのかも知れないが、それにしても私如きがよく批評し得るところのものではない。

が、しかし感心係ならいさ、かつとまらぬこともないやうに思はれる。最近私は自分の如違ひの本を少々讀んだが、その中で特に頭に殘つてゐるものを列擧すれば、津崎尙武氏の「どうなるか滿洲國」村島歸之氏の「善き隣人」野間清治氏の「榮え行く道」と實に高梨雅兄の「讀書雜誌續篇」の四冊で、各冊ともにそれ／＼特色のあるものだつた。その一は衆議議員としての著者が、親しく渡瀕して見聞した感想記ではあるが、自己宣傳の要具として刊行されたものが、さうかは別としてその匂ひを隨所に放散せしめてゐるのを、著者のために惜しみたい。その二は方面委員に關する好著として、第一に指を屈すべきものであらうが、著者が如何に大阪毎日に籍を有するとは云へ、例示する時、必ず大毎慈善團を忘れぬつたのに、新報社會事業團の活字が何處にも見當らなかつたのは、片手落ではないのかも知れぬが、公平なやうにうけとけなく、外の記事までさうかしらんといふ氣持を起させた。公的團體である方面委員後援會の依囑をうけた刊行物を私してゐるやうに思惟されて、折角の好著も美人に雀班の感があ

つた。こんなところへまで新聞の對立的意識を働かさないやうにして、欲しいと思ひながら巻を閉ぢたのであつた。

その三は、頭から宣傳をふりかざした本の如く、世人一般に思惟せられてゐる本である。私もさう思つてゐた。ところが讀み見ると案の定、頭から著者自ら體驗を語つて居り著者自身の經營する社務を、語つてゐるのでこれをしも宣傳だとして斥ければ、てんで一頁も讀めない本であるが、一社を經營する一社長の一家言として讀んで行くならば、平凡な言行の中に多くの眞理を含んでゐて、平俗聖書といふ名を與へてもよきさうだ。

その四の「讀書雜誌續篇」に至つては博覽強記の著者が、一去一來する車窓の風景を賞してゐるやうな調子で、多數の書籍に對し如何にも批評を楽しんでゐるありさまは、全く偉とするに足ると思ふ。又本書によつて自分が蒙る啓き得たことは、甚少ではなかつた。

我等が母校の創始者である五代友厚が、大隈侯の欠點五ヶ條を擧げて、その反省を促したるその五ヶ條の如きは、尤なるものであつた。その他餘を例示すれば、際限がないけれども、著者の愛著熱の熾烈を、隨所に表出せられてゐるのには、殊に、共鳴を深きせせめられた。盲言多謝、新報主筆、來

近作採行

路 郎 選

主婦の手でこなまるめるに小半日
酒呑みにはよう貸さんよと叔父は云ひ

雨 中 の 大 演 習

龍 顔 に 一 半 民 の 一 半

御 警 衛 の 一 句

鹵簿がいますぎで亂れる中に立ち
願髻も貧しきときの氣安めよ
鼻紙に包み情の籠る金
なるやうにしかならぬ寢床に落葉聞く
冬の風伴れて服屋がやつて来た
温き愛に缺とメスが要り
秋の蚊よ俺もまごついてゐる一人
内村鑑三集
神様は俺に宇宙を呉れるとよ

大 阪

同

雨

同

同 雅

幽

同 同 同

同 同 同

同 同

同 同

同

飛 燕 往 來

私信のごとくから公開を憚るやうなこ
ろは前略、中略、下略、又は×の傍も字
にしました、御詠承を乞ふ。

▼梶井井々樓君（石川馬）大火御見舞を忝ふし
茲に厚く御禮申上ます、去る二十二日午前一
時半折柄の烈風中に出火を報せられ、音なら
ぬ防火の盡力も、水利あらず、遂に空しく焼
失千餘戸、罹災七千人を算するに至りました
斯る中に幸ひ些したる損害もなく、無事なる
を得まして、お蔭の程を大變喜んで居ます。
早速御禮申上ぐ可き筈の處、彼是と遅れまし
て申譯も御座いませぬ。すでに御承知の如く
當小松は二分して河北、河南と言つておます
今度の大火は河南で錦水、萬魚はづかに無事
他は全メツで、柳人の御難思ひ半に過ぎるも
のがあります。昭和七年十月（翁那死）

▼顯原退藏君（京郡）川柳雜誌十一月號御惠
贈に預りありがたく存じます。特に武玉川の
研究は大家先輩の御説を承る事が出来、何よ
り有益に存じました。（○）狐妖の傳説は
我が國でも古く奈良朝末期の日本靈異記等
に見えますから強ち支那の受賣ばかりでも
ないかと思はれます。（○）平家物語に見え
る鱸の故事をふまへた作でせう。期れば武王
の白魚にまでなるわけですが、句は平家から
得た事は勿論、一寸氣づいたまゝ、御禮がはり
に申し上げます。十一月八日（社務）

▼石曾根民郎君（榮本町）今朝雪がちらついた
例年より早いそうだ。日本アルプスは眞白だ

舊店主の死

三四年どうでもほしい人なるに
 十二月戀する暇をうらやまれ
 冠を曲げても四疊半の主
 洋装に抱かれてる子の乳不足
 押し強い人と云ふのが荷をまとめ
 鑑札の齡をかくして酌いでゐる
 女學校行つてる子あり喫茶店
 母病んですれば出来ます水仕事
 夕暮の母へもつれた庭の下駄
 感激もなく樂器部の女店員
 そつと行くお花畠に女が居
 女事務ガラスは青く澄んでゐる
 こがらしに床間の軸を替へさせる
 百圓と言へばよかつた金を借り
 相傘の傘の匂ひや娘のにはひ
 店番がいかめし過ぎて買ひそびれ
 パツチャンと閉まる事務所によい仕事
 丁度よい家が病氣へ見つかからず

母病む

島根

緑之助

同

同 日本村

寄可也改

同

同 小柳子

鹽ヶ池

同 同 静太

大阪

同 同 夕鐘

神戸

同 同 明珠

同

同

りの武勇傳であります。事件は既に新聞紙上で御承知のことと思ひますが、神戸の外人邸に忍び込んで盗んだ小切手で、圖々しくも金二百圓もを物せんとしたごまの蠅を捕つたのであります。まことに逃足の早い男で悪事露見と知るや脱兎の如くピル街を走つたのであります勿論十手捕繩の勞は小生の獨演であります。此鼠小僧君は前科三犯阪神間を股にかけてのしれ



昭和四日ヨチキツを着る居す

ものであります。惜しむらくは彼の忍術白晝に効を奏さなかつたのであります。(露那野)
 ▼田村孝之介君(神戸) 前略 雄の會 御案内御禮申上ます 當日大阪へ出て居りました留守中に着きました、こんな會に出られなかつたのは残念に思つて居ります。(露那野)
 ▼齋藤松窓君(京) 暫らく御無沙汰をして居ますが御變りもなきこと、存じます、毎度「川柳雜誌」にて御健勝のこと、悦び居り候小生も「川柳街」に關係を持つてから一層兄等の御苦心も察せられます、御陰で狹い「京都」の雜誌から、柳界の雜誌たらんとして居ますがまだくです、よろしく御叱正を仰ぎます、木村君も近來御無沙汰して居ましたが

紅麩狩金のないのが苦にならず
 旅の宿白髮抜く暇ありはあり
 憎悪の眼をみ一疊へだてたり
 おどる音の風となつてしまひぬ
 土御子の光りにみゆる魂よ
 銀行を使ひと知らず貸せと云ひ
 失望をさせて更生せよと強ひ
 この冬の危険を患者まだ知らず
 改札を出るなり遍路鈴をふり
 欠伸して待つてましたもないもんだ
 六一樂 壯天に聲あり業火ぞよ
 夏にも冬にも苦情の言へる人間
 下知もつば欲しがる坊へあはてたり
 御茶の湯 琴花と總てが日本風
 奥様の如才なさゝにちと過ごし
 夜となる露は草木の溜息か
 逃げかたがお上手ですと云はれて居
 井俤人 人ほめる時雨に稻を刈り
 庭の蜜柑熟れ色を子が指摘する
 世間並に馬鹿らしいお辭儀する
 饅頭を嚙つてほつと甘いいき

大 阪 同 愛 媛 大 阪 同 別 府 大 阪 同 松 江 鹿 野

同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同
 美 山 賀 夫 車 人 卓 夢 人 太
 蒼 痴 天 翠 晃 變 水 英 禿 同 同 同 同
 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同

この度、小島紺之介東京、木村君の住所を知りたよりをして居ます、原稿も書いて呉れました、木村君や小島君を通じて川上君の消息を薄々知りました。今度「川柳街叢書」の一篇として清堂君が「松窓句集」を出すことになりました、十錢文庫程度のもので、私には木村君と貴兄とに短い序文のやうなものを御願ひしたいのです、本来なれば斯うしたものは日車君がやつて呉れる筈ですが、同氏とは御承知の如き始末で住所さへ知りませぬ、雑誌なども送る譯に行かないのです。句集は早ければ年内に出しますが、多分一月早々の事になると思ひます。右よろしく御承知願ひ度いと存じます。皆様御大切に申し被下度候。十一月四日 (路那死)

▼大谷五花村君 (阿蘇縣) 御便り拜見、御障りもなく益御雄視の由大慶至極に存じ候一と雨毎に寒き加はる東北の晩秋、淋しさを感ずる許りに候、此程中上京、十月以來、五回之多きに渡り、二度 三太郎君と豪遊を極め候例の如く飲む事吸めども盡きずの体たらくにて候へき、能因會の喜四雄と三人で飲んだ時は徳利の山を築き候(まさかそふでもなかつたが……)先生のあらざりしを頗る遺憾と致し候。是非御上京願上げ候、而して御通知被下度候早速まかり出づ可く候(路那死)

▼龜井花童子君 (函館) 拜啓 御禮狀拜見致しました。來年は創立十週年の由機を得て御邪魔致し度いと今から心掛けて居ります。例年差上げる赤蕪僅少ですが、本日鐵道便で差上ました故御笑納下さい。壺のついたのを

味のなき柿の味覺に似てをかし

病める愚陀君へ

棺桶を考へてゐる君羨まし
甘き日のにぶる夫婦へ鶏の餌

丸木砂土氏

せつくすの生命甘くもさらさらと

否定した丈けで細君従いて來る

俺の行く所はないか立ち話

恥かしくない馬の顔馬子の顔

丁稚まだ行かずに庭を掃いてゐる

決心を聞けば一生藝者する

こはがらせながらかまきり逃げてゆき

エプロンをよごさぬことがマダムにて

死にゆく二人へ塀がつゞいてゐる

蹄鐵屋出て今更に秋の晴れ

往來へ向つて代書坐るなり

土曜日の夕焼を見る戎橋

二階借義江のやうな聲を持ち

人民をにらんだ眼鏡置いて死に

一握み冬を見つけた物の影

或る官吏の計

大阪 靈

松本 同 民 郎

大阪 同 紅

神戶 同 華 水

大阪 同 紀 太

神戶 同 光 穂

大阪 同 春 秋

東京 同 白 丘 土

植木鉢へ入れて葉を眺めるのも一興です。見事に葉が出ます。差上げた品々に對して御配慮の儀は堅く御控へ下さる様特に申添へて置きます。子供等も憎い程丈夫です。本年正月に生れた男の子などは初めての下の齒の出した時は熱も出ず平氣な位ですから驚きました。三休君も只今では官を辭して田園生活の傍ら柳界に活躍されてゐるので力強く思つて居ります。乍末筆御奥様へよろしく御傳へ下さい。敬具 十一月十三日(露那宛)



「柳の絮」のことども

長野 吉高

最初におことわりしたやうに「柳の絮」にはそれ／＼モデルがある。だが、そのモデルに就て、詳しく解剖することは私としては出來ない。あの大近松が「すべて藝といふものは虚と實との皮膜の間にある。虚にして虚にあらす、實にして實にあらす、その間に慰みがある云々」といふやうな意味の事を言つてゐるが、これは洵に名言だと思ふ。私が「柳

無理ですよ手は二本しかありません
學校屋儲けた上に寄附をさせ
輪轉機人の手をもぎ首を鹹り

リットン卿へ

目の玉を入れかへて視る氣はないか
二階貸す札がきり、秋風や
早稲刈つてゐるは裸夫の源さんだ
何もかも許したばかりちゝる啼く
子守からおさんどんから主婦でゐる
思うても呉れぬに金を呉れてやり
自然美の中へトンボのつがひして
暇のある工場の隅の冷たくて
冬來れば炭代といふ赤字にて
令嬢の氣短か花の腰が折れ
のぞく指他人めいてる足袋の穴
洗ひ髪自分の噂ちらり聞き
猫叱る長い寝巻を着た女
刑務所の扉と氣附いて黙したり
事務服に戀の袂が突込まれ
枕經へ簡易保險だけが
灯の女まだ見ぬ兄がある不安

京都

草村

黒田

黒天子

松江

冬生

神楽川

收

京都

佐一郎

大阪

勝二

の案」にモデルを扱つたとしても、其れは一
の物語として事件を配分する必要から、一部
の歪曲や集中や散大を試みた事を、告げなけ
ればならない。で、時に私の創造したことが
モデルに累を及ぼすやうな事のないのを希
望すると共に、讀者に於てもこの點は十分に
理解ありたい。

○

川村花菱氏が、川柳に親しまれる事は全く
知らなかつた。私は、川村氏とは個人的には
何のご交際もしてゐないが、然しお互の仕事
の上では、その立場は多少異つても、時に誌
上で一緒に筆陣をしいたりする事がある。
本誌で計らずも、また、バツタリと行き落
合ふて、これも因縁かと實は思つたものであ
る。こゝで言ふのは大變に失禮だとは思ふが
曾つて川村氏が某誌上で、お仕事に關係して
の脚本に就てあるご意見を述べられたこと
ゝ、それが當事者間で一寸問題になつた事か
があるが、私は當時あのゴタを聞いて、川
村氏を大變にお氣毒に思つた。川村氏の述べ
られた事は、私も一寸拜見したが、それは輕
い意味でのご所感であり、取りやうによつて
は、一の眞理でもあるので、格別に問題を起す
やうな性質のものではない、と思つてゐた。
け實はあの筆禍問題には、私も驚いた次第で
ある。劇文壇とは縁の遠い本誌だから次第で
いても直接問題にはならぬ。と太平な氣分で
ゐた私も「これはウツカッした事は書けない
」と内心でヒクついたのはほんとうである。
何時か本誌で言つた通り、自分の書いたもの

馬鹿だつたことが解つた茄子の色
子を一人しか生んでない頬の艶
欠伸にも果ては哀しく骨がなる
秋は秋はけむりをつなぐ青空や

秋になればの子を想ふ

風に陽をのせてかなしくせまる秋
病んでから又光陰の早いこと

伯母の死

見舞つてくれたその人が死んでゐる

病むこと久し

病室に世帯道具が揃ふたり
病人へ長引く愚痴を押隠し
宿直のおごつた器目立つ朝
人絹と見られて女給とり合はず
サラド、トマト、へ赤きたすきの新世帯
今起きた女給の顔をきたながり
二階でも借るか秋の好きな同志
命がけの仕事へ行くに粥すゝる
半分は窓へ見せてるいゝ女
犬の鼻先でドアがしまつた
長距離はまだ出ず風呂をためらへり

島根

豊池

長野

大阪

石川

兵庫

同 同 同 同 同
羅 門

同 同
青 鬼

同

同 同
柳 兒

同 同
裸 人

同 同
醉 羊

同 同
普 天

に駁論を喰つても悪口されても、立腹しない主義ではあるが、と言つてめつたな事を書いてこれが向ふからの抗議となると一大事である。れ、ち、込まれた日には大變だ。「柳の絮」で祭の飛びついて、一番洒落れたい事も止め、所々ボヤケさせたのは、ありやうはかうした私の警戒からでもある。

○ 柳人に芝居をやる人達もあると聞くが、その熱心さには頭が下る。「柳の絮」は鶴のやうなものだが、でも多少は芝居の事を書いたのが、滿更に無縁でもなかつたやうである。

○ ご承知の通り、私は演劇方面の事を書き込んでゐる。勿論、十分なものではないが、それだけよく味つて、誤解の無いやうに願つて置く。といふのは、今日の劇壇組織といふものは、一般の人の想像以上に面倒なものである。これは日本に限らず外國でもさうだが、劇作家なり劇文學研究で名を成すのは、非常に難事である。文字通り一骨も二骨も折られるならぬ。私は常に思ふのだが、一体に日本には此の頃、文學青年といふ者が多過ぎるのではないかと。これは悦ぶべき事ではあるが然しまた餘程その吟味を要する事もあると思ふ。文藝の街ひに生きる事と、文筆の實際的生活をするといふ事とは全く別である。これを混同してはならない。某作家の一枚の原稿が幾らするのだの、やれ某が原稿で家を建てたのと、尻のやうな馬鹿らしいゴシップを得

ニンニクだ林檎だ麩だと瘠せて行く

阪神沿線

停留場醫者の廣告ばかりなる考へてゐる表情は髭を撫でお日様と遊べと醫者は言つたけど

坑夫等の眼に夕焼がまぶしすぎ夜更しはけじめをとつて無事に寝る

友の死を悼む

院長の歸りも待てず秋を逝く人絹の羽織へ酒をこぼしたり

公休日就職したい人が来る遊ぶ子の帯がゆるんで黄昏れる

郷愁に街のポストが濡れてゐる枝豆に鹽を振つてる祭の灯

お天氣に傘をさしてゐる子が戻りその先を濁しておいて茶の所望

絶景へしばし女は忘れられ雪催ひ母起きてゐてくれるなり

丹精の菊一とわたり齒をみがきたしなみの爪剪りでなく足袋の爲め

遠景を遮る工場儲けて居

松本

堺

大阪

松江

神戸

京都

金澤

大阪

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

司

外

峯

子

村

人

雨

友

意でまき散らす者があるが、あれは大變いけない事だと思ふ。後進の者を誤らすばかりだまた、そんな事を羨望して、作家にならうなんて思ふのは不心得千萬で、こんな人は作家など志望せぬのがいい。始めから止めたがい。『柳の絮』の何回目かに、現今ではいい脚本であれば誰のでも上演され得る可能性がある、と書いたと思ふが、實はあれを見て早合點した人があつた。私としても迷惑である固い信念と頭腦のある人は別、無定見で單に熱病程度の若い人には、文壇は正に地獄である。私は、これ等の事を多少にも諷刺して置いた心算だが、よく解つて貰へなかつたものと見える。

○ 私には、若い一女性の劇壇進出を描いた。戯曲には戯曲としての作り方があつたやうに、物語には物語としての書きやうがある。繰り返すやうだが、純粹な物語でないから一女性の動きといふものがよくは書かれてゐない。凡そこの程度まで想像しやうが、それは讀者の自由だが、とにかく女性の文藝進出は私の最も賛成するところである。わけても劇作方面に新地を開いてくれる事を希望してゐる。これは『柳の絮』にも書いて置いた。だが、こゝに重大な事は、無定見で作家志望をすることは女性の場合は男より一層危険である、といふにある。文學少女と聲の莖とは油断すな、とは笑へない言葉だと思ふ。

○ 讀者も氣づかれてゐた事と思ふが、『柳の

支拂つたらすとば女將げんきんな
 地に落ちた毛虫のさまで生きのびて
 軍隊に居ればよかつた失業苦
 山に登れば自ら尊し
 缺席の机の廣さ陽があたり
 鐵兜水鐵砲が欲しくなり
 失戀の手紙焼く日の曇るなり
 紹介がないから門は開かれず
 妹にふざけて少し酔うてる
 肩上げのある娘とない娘同じ年
 久方振の病床を離れて
 あんよは上手ひとせ振りに觸れる土
 刀根山病ににて
 いつ癒るとも知れずお薬飲んでます
 うたうてもく秋の夜はさびし
 故郷のさびれを汽車で見通し
 自負心を持つて單行本を出し
 喘ぎ切つてるへ救の手の遅し
 このはなやかさを引けばゼロとなる
 大阪に住み通天閣を黙殺す
 酒飲めば邊りに用捨せぬ男

京都 鳥取 大阪 同 京都 同 大阪 松ヶ池 大阪 松山 大阪 松江

迷 同 湖 同 柳 同 青 同 蛙 同 松 同 雨 同 路 同 樓 同 吸 同 人

「祭」には大抵毎號のやうに誤植があつた。誤植されては困るやうな誤植もあつたが、然し別に差支へないやうなのは時に愛嬌になる。これ等は、植字や校正が粗漏なのではなく、一面に私の文字下手から来る原稿が悪いので、この爲め關係諸氏や讀者にまでご迷惑をかけた事を恐縮に思つてゐる。

とまれ、何んだか重荷を下したやうなホツとした氣持がする。ある一つの仕事を完了した愉快かも知れない。書き上げのお祝ひに、一杯飲むといふやうな事は、全然に酒を好まない私には出来ない藝當だ。私はやつぱりつひ迄の通り、何かを書き上げて、しかめつ面のまゝ、机にもたれて、煙草でも吹かすのが適當なやうである。

かたい鉛筆

自殺す可からず
 長生きすべし！

安川久流美

◇ 神戸市は長狭通り上の吉野館一室で、古い川柳人、中村一山氏の紹介し初めて主幹麻生路郎氏にあふた時、同氏は何處を見ることもなく、顔をはずかにして居られた。その時無論無言、一山氏が口を切るまで、ナンにも喋舌らず、笑ひ顔もせな

理解した親でありたく甘やかし
 淋しさを知つて、何の悪魔主義
 小蒸汽に曳かれて妻は米をとぎ
 さも似たり豚にチヨツキを着せたやう
 ガス會社來て鋤燒の店になり
 満足は俺一人で出來もせず
 風呂が沸き近所へ知らす程になり
 田舎の秋祭り
 地車に乗つて巡查も囃し立て
 ばらくな心の底へ泌みる秋
 お二階が空いて淋しい戀だろか
 白菊氏結婚の噂
 新妻を迎へる家をさがしに出
 苦勞性隣りの香羨まし
 依頼心が肩をすぼめて去にました
 天王寺參詣
 道ばたの乞食が煙草すつてゐた
 ソーダ水だけで歸つた良い男
 姉の空想名月の様な戀
 冗談もまげて子供の名がきまり
 高架から見える我家の小さ過ぎ

大	岡	大	今	大	高	大	兵	石	大	堺	大	石	大	神	大	神
阪	山	阪	治	阪	知	阪	庫	川	阪		阪	川	阪	戸	阪	戸
憲	雀	一	曉	小	鐵	詩	遊	し	小	一	胡	北	水	麥	雷	同
坊	子	郎	騎	童	吉	與	步	と	松	柳	蝶	陽	郎	刀	兒	舟

めたらヤツとしてはゐられぬえがさうセカ
 くしないでやりたまへ。俺は催促なんかし
 ないよ。俺は辛棒強く待つことに決めてゐる
 んだ。淋しくなつたら軒の雀たちと柳樽の話
 をして待つてゐやうよ。

叔父

路郎生

新嘗祭の朝、私の寝込みをおさへた一人の
 老人があつた。
 老人は椅子に深く腰を下して、彼が私の叔
 父にあたることをうなづかせるために、じゆ
 んじゆんとして語つた。
 彼の語るところによると彼は私の父の弟

路郎先生筆新春用

掛軸・横額・小物・短冊

小軸八入 貳拾圓
 小物五圓 貳拾圓
 短冊額 拾圓
 參圓 (金前)

申込締切二十月十五日限

川柳雜誌社代理部

にあたるのださうな。私の父に、姉や妹のあ
 つたことはウッス／＼知つてゐたが、弟のある
 ことは少しも知らなかつた。私の姉も兄もこ
 の叔父さんの話を私に聞かしてくれたこと



武玉川初篇研究 (七)

梅 本 秋 農 屋
森 東 魚
蛭 子 省 二

(145) 物書は寺中て憎む掛人

省二 物書とは書に巧みにして、代書などなし得る事。
秋農屋 物書は「物かけばではない歟。「物書」は手を能くかく人で、代書には限らぬと思ふ。

東 魚 かけばであらう。僧侶は能書でありたい、僧自身もさう心掛けてゐるであらう。そこで存外能筆な掛人などは羨望的とされる。我々も及ばぬ好い字をかきくさる心憎い奴だ位の心持ちであらう。

(146) 塔を見て思へは人も怖い物

省二 日本に於ける大ビルディングをみても、今日の科學知識から、そう不思議とせぬ程になつてゐるが、五重の塔を最初にたてた、古人の工夫には人の力も偉なりとする思ひがある。

秋農屋 露伴翁の小説「五重塔」なども、此句の參考になる。

東 魚 近代科學の發達を思へば、全く人も怖いものである。

然し此句は信仰の力強さをも、匂はしてゐるやうだ。

(147) 行水廻す根夫川のうへ

省二 相摸足柄下郡を流るゝ、根府川ならむが……

秋農屋 根府川より石材を産出し、世にこれを根府川石と稱ふ。其石材は扁平であるから、大なるは墓碑に造られ、小なるは庭園の飛石に用ひられる。此句も庭の飛石を咏むたのである。
東 魚 根府川は現在の熱海線の沿線である。行水盥を根夫川石の上へ据えるといふ意であらうか。

(148) 切れ盃を供か見て居る

省二 縁別れの盃一因に反對を結ぶ盃仕組の等しい句に「供か見て搾い盃(武七)」。

秋農屋 切れ盃は男女が合意の上で、情交を斷つ場合に、取交す盃の事であつて、それを供の者が傍觀するのであらう。場所は大方酒樓で、女は藝妓などであらうと思ふ。

東 魚 言はゞ佐野治郎左衛門に於ける、治六の様な主思ひ

な供なのであらう。

(149) 取扱いも寒いから鮭

省 二 鮭の腸をとり素乾にしたもの一鹽鮭でない一手觸りから淋しい寒い感がする。蕪村は乾鮭の句を色々作つて居る。「とし守や乾鮭の太刀鐔の棒など」。女さびしく乾鮭をよぶ

（武八）

秋農屋 俳諧では乾鮭を、冬の季に入れてあるから、自然寒い感じも起るのである。

東 魚 枯木の様ながら鮭、みるから寒い感である。「から鮭や琴に芥うつ響あり」が蕪村にある。

(150) 愀氣の屋根を廻る夕立

省 二 盆をかへすような夕立では、夫婦喧嘩も流れてしまふ。一寸面白い表現だ。

秋農屋 〓 ヒステリイの女が愀氣を起して立騒ぐと、板屋に降り注ぐ夕立のやうに、甚蕪しいけれども、暫時にしてそれが罷むと、雨雲の晴れた青空のやうになる、といふのであらう。

東 魚 〓 廻ると云つたのはどういふ心持であらう、秋農屋翁の解は大變面白いが、「愀氣の」の「の」が如何であらうか。「は」の軽い心持ちとみれば見られる。

(151) 面白く反る四ツ手引かれ

秋農屋 〓 「引かれ」は何と讀む歎不明なれど、これは四ツ手綱を引上る時、身体を後に反らすものであるから、それを咏むたのであらう。

東 魚 〓 原本の假名の誤讀、「引かな」である、十四字の調に

は珍らしい。句意は前説の通りである。
省 二 〓 原本をみると「那」の字であるから、「れ」と見てしまつたのであらう。鐘撞が反るよりは、四ツ手に反つた方が、

御自身丈けには、さぞ愉快な事であらう。——ある男が投網にゆき、いと面白氣に反つて引上げみれば、ガマ口が懸つて居る。中に二十圓金貨が二個あつたので有頂天になり、再び網を投げ反れる丈け反つて引上げたら、魚が這入つてゐた。エーこんなもの。——これは某誌に載つてゐたが、「口拍子」（安永）の釣の話の燒直しではないか。

(152) 主のない扇を遣ふ渡し守

省 二 〓 扇は忘れ勝ちなもの、殊に渡しなどでは。渡しが身分不相應な扇を平氣で使つて居るのが面白い。

秋農屋 〓 この渡し守が烏帽子を着けてゐると、一層面白い圖となる。

東 魚 〓 えてありそうな事、穿つた句である。

(153) 煩ふ馬を澤瀉へひく

秋農屋 〓 難解の句であるが、此澤瀉といふのは、本郷三丁目

の藥種店伊勢屋市兵衛のことで、其處へ病馬を曳いて行き、藥を買つて服用させるといふのではない歎。此藥種店は兼康と競争したもので「澤瀉を神農横に兜めつめ」。澤瀉を買つて兼康只聞かれ」などの句がある。又此處は中仙道の要衝であるから駄馬も多く通行したであらう。

東 魯 〓 御教示によつて成程と思つた。全くその意味であらう。
省 二 〓 本郷の澤瀉とは氣づかざりし。

(154) けふいもの喰ふ木からしの月

秋農屋 〓 初冬の木枯しの吹く頃には、木の葉が多く落るのでそれを掻集めて焚捨る煙が、夕月に掩ひ懸るのであらう。

東 魚 〓 落葉を焚いて何か焼く喰ふ冬の月夜の淋しさを詠むのであらう。「けふい」は「けむい」或は「けふい」となつてゐる

ば解り良いのに、一寸よみ惑はされた。

省 二 けふいもの喰ふ、などは、十四字詩的な省略手法だ

(155) 仕送りやうまくたまして足拍子

秋農屋 且那をみつめて仕送りをさせる、踊子を咏むだもの
敷。

東 魚 これも六ヶ敷い句だ。恐らく前説の如きであらう。
省 二 踊る足拍子で、踊子なちむ。

(156) 泥のつく物とは見へぬ御所車

省 二 御所車土のつくとは思はれず(不斷櫻村)
秋農屋 説明の要なし

東 魚 立派さ尊さを詠歎したのだらうが、現し方が餘り理窟めいてるので、味が乏しくなつたのであらう。

(157) 二階から心の人へ咳はらい

省 二 さまに遣へば遣ふ咳ばらひ(武十三。思ふ人へ)の咳拂は、最も有効。

秋農屋 「心の人」とは、吾が意中の人の義、それが下を通るので、注意を喚起するため、咳拂ひをする。

東 魚 「心の人」は巧い言葉である。

(158) 若衆は聲に出るうら枯

秋農屋 色若衆も漸く年頃になり、聲變りがするやうに成つては、草木の末枯に等しいと云ふのである。

東 魚 巧い言ひ方をするものだと思ふが、ちと氣取り過ぎてる感もある。「出る」のイヅルの響があんまり句の味に重すぎるせいだらう。

省 二 川崎に詣る陰間はもういけず、聲變りされては艶消しだ。

(159) 六月キはたらく靈山の柚子

省 二 ？、？、？、？、

秋農屋 釋迦の説法をした靈鷲山か、京都東山の靈山か。句意は不明

東 魚 難解

(160) 元結紙も粘の世の中

秋農屋 元結紙で有名なのは、文七であるが、それには關係がなく、只「粘」を法に掛けたの歟。

東 魚 糊口の料であるといふ事に云ひ掛けたのではなからうか。

省 二 そうであらう。粘と糊は通ず。

(161) 湯女の情も一まはりつつ

秋農屋 これは昔の風呂屋の湯女でなく、温泉場の湯女で、最も有名なのは攝州有馬である。

東 魚 一廻は七日間の意、温泉や薬は大抵一廻宛で効果を試みたらしい。箱根七湯など廻るのに、一廻りづつ湯から湯へ轉じてみる。従て湯女との情交も一廻りづつといふ諧謔の句であると思ふ。

省 二 武玉川七富に、「七日七日に湯女の衣々」とある。

三代男卷二 戀は愈らでいな酒呑、湯女の情は泣みてこそしれは、有馬の湯に遊んでの事、「男もわりなく馴れて、古郷の空を忘れ始め、一まはりといひしが、二まはりより、いく廻り、かくあるべきならねば、又の年の此頃向ひ湯をとちぎれば」とある。「薬より温泉より泊瀬の一廻り(ケイ四)

(162) おかしからるる衛士の有明

省 二 衛士は宮門の守衛。火をたき警備の任に當つてゐる

月は天にあるままに夜は明ける。おかしがらるる面持よ。

秋農屋 可笑からるる意が不明だと思ふ。

東 魚 白張の仕丁が寐ぼけ顔、真面目くさつた寐ぼけ顔が可笑しいのであらう。

(162) 双六の戻る箱根に櫛か落

省 二 「じれつてえのうと大津へ又戻り」などの如く、箱根へ戻された處で、櫛が落ちて、遊び娛むでゐる人々を想像し得よう。

秋農屋 道中双六の後へ戻るのは、京都に近い驛であるが、箱根に戻る双六が有つたらう歎。

東 魚 恐らく箱根の關を難所と考へて、三島あたりで運の悪い采の目が出ると、江戸の方へ二三驛戻されるものがあつたのではないか。道中双六では小田原のところに、箱根の畫があつたやうに思ふが、今手元がないから充分解らぬ。兎もあれ、じれつたがつた途端に、櫛が落ちたとの意であらう。

(163) 白粉も袂につけはたかかれる

省 二 紅でも鼻の先につけば拭はれてしまふ。袂についた白粉では何んの興もない。——假りに一句列べてみる。「うどん粉のひよんな所に哀なり」(金砂子上)

秋農屋 淺薄な句であると思ふ。

東 魚 理窟めいてゐるが、前句に因ては救はれる所があるのかも知れない。

(165) 時鳥近く見られていとま乞

省 二 一ト聲鳴いて、もう見えぬ——そして、おいとま乞をする。

秋農屋 いとま乞の意が判明しない。

東 魚 見られた途端が別れたといふ心持ちであらう。

(166) 柳と路次へ這入節季候

秋農屋 此の柳は師走の餅場の時餅花を造る料で、それを持つた人と共に、節季候が路次に這入るのである。

東 魚 成程、お説の通りであらう。

省 二 「目出たさは柳に米の花が咲き」の餅花の柳ですか。

(167) 水ものにして田を質に取

省 二 融通する側では、水ものに評價してしまふ。

秋農屋 期限がくると流れる、といふ意ではない歎。

東 魚 段に何依はとれるといふ見込みを、「水もの」といつたのであらう。

(168) 食傷は覺悟のまへの遣唐使

省 二 五色のへどを吐いた事であらう。某禪僧が歐米へ布教に出掛け、歡待され西洋料理を食はせられ下痢症に罹り、伴僧の精進料理外には、手出しをせぬ事にしたとの話がある。

秋農屋 現代でも外國の賓客を、御馳走責めにする國がある

東 魚 馴れぬ油こいものを連日の宴で喰はされては、全くたまつたものでない。可笑味の句である。

(169) 蓋明てあいその盡る御菜籠

省 二 「のぞいては愛想のつさる御菜籠」ともある。お白粉香油、紅等々、遂にはこゝに記しにくい様なもの迄發見された記事はこのころ。

秋農屋 人工の松茸など。

東 魚 全く内幕をみたら長局なんか、ひどいものだつたらう。私の父も(御菜ではないが)さる後室に「人工の松茸」を頼まれて、實に困つたといふ話をした事がある。

(170) 三下りころせくと人通り

秋農屋 「花の山ころせくと三を下げ」といふ句が柳多留拾

遣にあつたと記憶するが、これも其句と同巧異曲で、昔の騒ぎ
唄や甚句の三絃は、其調子が多く三下りである。

東 魚 〓 「ころせ」が如何にも享樂主義、利那主義の江戸
氣質がうかゞへる。

省 二 〓 陽氣に浮れたすとその感がある。拾遺春之部は「花
の山いつそころせの三下り」

(171) 蒸籠の湯氣を抱へて奥へ行

秋農屋 〓 饅頭か柏餅などを蒸して、それを蒸籠のまゝ奥へ行
行く、と云ふ丈けであらう。

東 魚 〓 湯氣を抱へるといふ言葉の綾に、興味があるだけで
ある。

(172) 馬の尾のふり負て居る水車

秋農屋 〓 米俵を荷ふ駄馬であらう歟、蠅が多いので尾を振つ
て拂ふ。

東 魚 〓 「ふり負ける」は水車も絶へず廻る、馬も絶へず尾を
振る。然し矢張り馬の方がさうく休みなしには行かぬといふ
心持ちなのであらふ。

(173) 廿日亥中に上を行うそ

省 二 〓 水車場點景、前句からの勢ひで得た作。

秋農屋 〓 二十日月の昇るを待つと云つて、戀人の來るのを待
つといふの歟。

東 魚 〓 廿日月は亥中月ともいふ。十五夜十三夜はおろか、
二十日月にだつて來る、お前を忘れずに來ると、遊女の上握手
をゆく酒客の嘘ではないのか。

(174) 足跡は親子と見へるかきつはた

省 二 〓 杜若は盜まれる句が目立つ。「根こそぎとはつたな

い盜み杜若」と無風流を笑つて居る。親子して欲しがつたとこ
ろに感興がある。許六は百花譜に、「杜若はのぶとき花也、う
つくしき女の盜して、恥をしらぬに似たり」と評して居る。す
ると盜まれるのも因果なのだらう。

東 魚 〓 子供が欲しがつたのに、親がとつてやつた意味か。
どうも句の味が充分判らぬ。

秋農屋 〓 水邊に大小の足跡があるから、花盜人は大方親子で
あらうと想像するので、其處に詩趣が有るのである。

(175) 口留をしても忘れるめうかの子

省 二 〓 茗荷だ生薑だとの空響はあるが、茗荷をくへば物忘
れすると言はる。口留をされたような事は却て話したい氣にも
なり、内密だなどと喋つてしまふ。茗荷の子の表現は宜し。

東 魚 〓 めうかの子は、洒落氣分でいつたものであらうか。

秋農屋 〓 賛成

省 二 〓 因に茗荷の鈍根草に對し、薑を利根草といひ、二つ
列べた作が多い。「勘當の墓も茗荷も間に合はず」(武十六)。薑
になり茗荷に成て掛人」(武十七)

(176) 上り馬乗る寺の若黨

省 二 〓 寺の若黨は寺に預けられてゐる侍と解した方が面白
いかと思ふが……騰馬は性質の荒いはね馬。

東 魚 〓 寺侍といふものがあつたのだから、矢張其寺に從屬
してゐる若黨なのであらう。上り馬は俚言集覽に蛭子氏の申さ
れたやうな説明があるが、どうも句意がはつきりしない。寧ろ
ふのぬけたやうな、非悍馬の意ではないか。

秋農屋 〓 寺院の若黨に相違ない。又上り馬は乘馬として使用
する事の出來ぬ癡馬であると思ふ。武家の若黨ならば悍馬にも
乗るであらうが、柔弱な寺院の若黨であるから、漸く癡馬に乗
るといふのである。

省 二 〓 お説御尤である。「上る」には癡物の意味はある。實

は解を下す時に迷つたのであつた。夫れで寺院直屬の若黨と解しなかつたのである。二三調査した時一馬のあがり騒ぎたるも恐ろしく(枕紳紙)などあり、畜産組合の友人に尋ねてみたら荒馬を上り馬といふとの事であつた。其後武玉川十二篇で一寺を出て昔に歸る上り馬の句を見出した。

(177) 祭もなく人近い神

省二 人近いは、よく目につく、目にふれ勝ちといふ謂であらう。

東 魚 人に親しいといふ位の意ではないか。

秋農屋 村落などに在る淫祠で、何時にも祭祀される事がなく、堂宇は子供の遊び所となると云ふやうな場合であらう。

(178) 轉んだ跡の青い淡雪

省二 草の萌出る力。

東 魚 十七字の發句體にしたら、きつと月並臭味ありとして、難ぜらるゝ句であらう。

秋農屋 淡雪には多く春雪とされてゐるが、萬葉集には冬の淡雪を詠むた歌が有る。

(179) 出入座頭の響る新道

省二 出入商人などの出入に等しく、座頭も藝を賣つたもの、新道をほめる理由もある。

東 魚 出入先きで、新道の噂をするのであらう。

秋農屋 此の新道は樂屋新道、下駄新道等の新道ではなくて新に開通した道路で、それを盲人が喜ぶのである。

(180) 見しらぬものを捨ふ左義長

省二 捨ふは捨ふの誤、先年名古屋に旅してゐて、春日神社に參詣すると左義長があつた。街の道端でもやつてゐて、ドンドと稱して居る。吉書揚は少なくなり、門松注連飾を焼く許りとなつたようだ。妙な物を捨ふやうな場合もあるやう。

東 魚 原本確に「捨ふ」である。變なものを捨つたと丈けで

此句は味があるやうに思ふ。
秋農屋 東京市で大掃除をする時、塵芥の中に名の知れぬ物を見る事があるから、左義長をやく時にも、見も知らぬ物があるであらう。

(181) 常世か馬の疊まで喰ふ

省二 佐野源左衛門常世 源左衛門よくも鏝をくはぬなり」東 魚 疊まで喰ふの諧謔は如何にも面白い。

秋農屋 其後には、根木板を剝いで焚火をする。

(182) 相談のしまらぬ所ひかし山

省二 しまらぬは決定せぬ謂、東山はどちらも歩の向けたい、氣移りのする所許りだ。

東 魚 江戸ツ子なら、隅田堤で直に話はきまる。京の人は氣が長いといふ意味も、句はしてあるのだらう

秋農屋 眼下に祇園町あり、又先斗町あり。若者の思案に迷ふも無理でない。

(183) かな谷泊の一日の運

省二 越すにこされぬ大井川、一日違ひで汎濫。「きついしけ島田金谷は人だらけ」

東 魚 「二日の運」の表現は要を得てゐて、巧い云ひ廻した秋農屋 十四字詩は、斯く含蓄のある語を使用するのが、最肝要である。

(184) 人目の隙に妻の行水

省二 「ゆかたくりやよと言ひすてて嫁しやがみ」などの行水趣味も減る。庭の隅を戸板一枚で圍つたりする素朴の風呂がよい。ソウメンをゆでた湯などを母が、いれて呉れたものであつた。

東 魚 句は平凡なやうに思ふ。

秋農屋 これを「嫁の行水」とすると、川柳となるのだが、俳諧であるから「妻」でも差支はない。



川柳塔

ひ町・素琴・山緑・合議選

○ 西田 艸 樂

マツチの火あるかなきかに秋は晴れ
服の上へ首が出てゐりや今日も無事
シンの子へ暗がりを叱りつけてやり
寂滅のマツチを見つめて秋深し

太田朝陽子を送る

九州の鯨も同じコツで釣れ
日曜の子等の歡喜へ釣込まれ
藏の軒に蜜柑ならせて暮に暮し

○ 關本 雅 幽

長屋の灯落葉聞きつゝ眠りる
大根が賣れ冷めたい風になり

○ 岩崎 柳路

八百長の馬へ決勝の鐘が鳴る
安物のレビニューゼラチンの赤い色

○ 朝田 新水

ハンカチの白さに女泣いて見せ
舌のもつれと合はぬ三味線

◇ 水谷 鮎美

雨うつくしき晝のがらすの女ら
妓らは百圓紙幣に鼻つままり
泡白くうまれる晝のおかみさん
女らにまばゆくひかるからす貝

秋 祭 (十月十七日)

神樹の枝くねりくねり下るなり

天野卜居君入院切開手術 (十一月二日)

姉さまのまごゝろにそふ腫とはなり

◇ 石森 靜太

もの思ふ細きうなじへ灯がともし
はる、なつ、あき、すぎてやまひいえす
さんくゝと秋の陽射しに寂しがる

悼村上英夫兄、出棺の日 (二句)

出棺へ黙々と土のつめたき

空すみで澄みて君死んでゐる
なつかしい訛へ女店員の腫

◇ 尼 緑之助

比叡山にて (三句)

叡山やあほほじろき僧ばかりなる
あけび食ひく比叡を降りて来る

伊勢にて

五十鈴川神に仕へた魚の群

神戸にて

煙草吸はぬ者はつまらない波止塲

◇ 西村 明珠

理解してもらつてからは落つく手
働く人入用とあり風の町

此頃のくらし軸まで値が下り

◇ 廣江 天痴人

叱らんと見据えてをれば子の涙

松江P 劇場解散

再組織成る日を待つて村へ散り
泣かされて田の畦へ来た子に憩ひ

◇ 春元 紀太

おもちやでは無い鐵兜が列んで居

討伐令競馬のボスターと並んで居
歸り路不圖口をつく満洲節

◇ 喜多 春秋

刑務所を出てにやくと笑ふなり
母親へ發見をした子供の眼
浪花節 語る女の低い鼻

◇ 吉田 水車

恨みでも言ひさうにしてモデル立ち
握らせるやうにパス嬢釣を出し

◇ 熊谷 紅

心にもない嘘心臓が動悸する
呻嚀に通して寄附を頼まれる

◇ 日野 華水

勝負の中で嬉しい男の子
なぐさめの言葉がつかした窓へ立ち

◇ 松下 小柳子

内職へ陽氣な八百屋さんがくる
風強く夜學生等のハイモニカ

◇ 奇可愛 改 岩垣 日本村

白粉がはげぬ程度に泣きなさい

苦味丁幾だるが博士の手がうれし

◇ 市場 汲食子

愚痴つばい男と里の親も知り

◇ 木村 晃卓

一錢で僕の子になる隣の子

◇ 生田 翠夢

盤若心經朝の山へすき透り

◇ 中澤 濁水

咳洩れて養老陀も秋に入り

◇ 中西 おさむ

車窓から着物脱いでるところが見え

粒々集

— 路郎選 —

御影 長崎 柳 秀

梯子酒だいじがられていやがられ

新家庭嫁の荷物に場所を取り

飲む話下戸は用事を思ひつき

圖書館の窓へさし込む無駄な月

人間をよさうと思ふ日もありぬ

朝鮮は妓生の手を握る所

サンルーム戀と病に惱まされ

新枕咽喉につまつた聲になり

家中で歩きつかれた病み上り

大阪 長谷川 一徹

御廻診わが先生も付き給ふ

高射砲の音とや私宅ねそべれず

可愛くてならぬ怒りに青ざめし

借りるのも良けれど君は来ずならむ

ダイヤグラム妻に任せて突立てる

松山 前田 五健

乾し物にさへ階級のある官舎

ヤヤツくと舞妓騒がすよい紳士

器械みな動いて人の小さく居る

住友鑛山四阪島の見學

光耀抄

— 段乃選 —

大阪 みね 子

親友は泣いて邪心を捨て、居る

眞正面過ぎる世相にいどまれる

ありがたき聖駕に丸くく母

感情の高さ低さへ秋も末

反省はさほてんにある影に似て

大阪 房

子

御自慢の菊へ濟まない竿が落ち

檢温に吾が度の見へぬ父となり

待つ母へ巻いてお壽司の置き處

右左生駒の阪の揚げ豆腐

挨拶の長さ背の子は反り返り

大阪 茂

代

もうすぐです三番目の瓦斯燈です

アモルスキャンつけた効果は子の淋し

大阪の灯だ歸つたぞビクニツク

大阪 春 枝

女

残る虫どう思つてか出て來てる

嫁ぐ娘へ襟ひとすじも心より

洗ひ張り縫うては着てはくりかへし

大阪 公

子

兄さんが來て相談がまとまらず

これで百あれで二百と貯金帳

外出の雨に日の丸ぬれて居る

釜ヶ池 凡

子

きやすめのことはにころやすんぜず

病人と見えぬ肌もつ者もあり
退屈を花壇にうつす日本晴

大阪 貴 志

子

新舊女中交代

さは云へど逃げた魚より釣れた魚

木枯しへ母が餘命のすゝり泣く

一應はどれも理屈の有る無心

大阪 機 見

女

夕ぐれにかゝわりもなく本がよめ

ボマーの匂ひに怒りほぐれかけ

大阪 伊 勢

子

病床の心細さへジャツが鳴り

煙突を目あてに行けと教へられ

守口 武

子

天ふらで今日もすませる子澤山

大阪 愛

子

行水の中に橋立浮いてゐる

大阪 美 津

子

炭はたちちれつたい程客はこす

神戸 茂 も

代

田舎からとゞいた栗に胃を痛め



柳

の 長野吉高

(110)

「オイ、この眞向ふにゐるうらなりの南瓜みたいな顔してる奴は誰だい？」

「ありやア小説家の呑舟だよ。」

「あいつの左隣りで、しやちこぼつてる禿げ頭は？」

「××大學の不勉強教授だらう。」

「いま、頬を撫でてる豚のやうな奴は？」

「オイ、聞えるぜーあれは知らないよ。」

「ぢや、あの窓の近くにゐる下駄みたいならに白粉をコテ

くぬつてる女は？」

「てッ、うるさいナ。」

油で、頭をデカ／＼と光らした、どうせ銀座ルンペン組らしい都會的に去勢された若い男が二人、ヒソ／＼とさ／＼やき合つてゐる。そこは新宿の「青十字」の二階。

天井には、シャンデリアがまぶしく輝いてゐる。三、四十人餘り集つた人達の中で、色とり／＼に粧つた婦人の姿が半数以上を占めてゐる。二列に流れた、その正面一番端に、す

つきりとした洋装姿が一段と目立つ貞子さんがつゝましく、上半身をやゝ俯向き加減にして眼を伏せてゐる。貞子さんと向き合つて、棚酒しの土人形のやうな格好で、古ぼけた紋附羽織にセルの袴をはき、ぼつねんと腕組みをしたまゝ、眠つたやうにしてゐるのは雨軒居士だ。すこし離れて、何時もの通り好んで着る鐵無地の羽織をひっかけに八福君が、何か打合せ事でもあるのか目立たない姿勢のまゝで、武君と小聲で話し合つてゐる。

すでに、貞子さん始め雨軒居士や八福君等の挨拶が一通り終つた後で、さつきからテールブルスピーチに入つてゐる。いま立つてゐるのは、赤ら顔の脊の高い劇評家の獨舌君だが關西訛りでもう二十分も雄辯をふるつてるところである。

十一月の中旬、木星座が×××場で上演した貞子さんの「ニロ」は、豫想外の成功で、その新しいテクニツクは極めて野心的なものとして、劇壇ではかなり噂の種になつた程であつた。かゝる評を得たのは、八福君が演出後援の勞をとつた事にも多少は原因したかも知れない。この上演方面が一段落す

ると、八福君は貞子さんに別な仕事を與へた。それはこれまでに、貞子さんが習作した戯曲の中、比較的佳作と思はれるものを二、三篇だけ雨軒居士と八福君とで厳選し、××社から貞子さんの戯曲集を出版することである。この相談がまとまつたのが、暮も間近いからつ風の吹く日。

越えて一月、付印に着手して、いよ／＼出書の運びになつたのが三月下旬である。本は四六判で、雨軒居士と八福君とが序文を書いてゐる。表紙には、古代ギリシヤ劇に於ける四分三圓形劇場が、印象派的な手法で描かれてあり、藝術味豊かに、それは極めて上品なものである。これは、ミミ子クンが苦心した装幀だ。曾つては、畫壇の女流天才とまで言はれたミミ子クンの筆力だけに、實に美事な出来栄である。

日本では普通、雑誌や本によつて發表された戯曲が上演されるが、外國ではこれと反對で、最初に作者は多く劇場や劇團宛に書く。そして上演されてから後、その戯曲は始めて雑誌なり單行本なりに發表される。だが、これはその國々の慣例によることで、どちらにしろ餘りたいたした事ではないが、とまれかくまれ貞子さんは、偶然この外國流に倣つたわけである。

「— え、まことに蕪雜なこのみ申上げましたが、これもちまして、この出版記念會のご挨拶といたします。」
獨舌君は、やつと席に着いたやうだ。武君がすぐにヌツト立上つて

「くどく申上げるやうではございますが、お集り下すつた皆さまは、とくに親密なご友情をお投げ下すつたこと、信じますので、餘り形式ばつて形式倒れにならないやう、言葉通り

ざ、つくばらんに、何なりとお話下さる方がこの記念會としましては、却つて意義が深からうかとも存じます。で、これは司會者の方から、よくお願ひ申して置きたいと存じます。」
武君の言葉が終るか終らない中に、眞赤なネクタイをした夕陽詩人が、立上るなりポケットから紙片を取り出して

「カンガルーは砂を喰ひ、豹は家鴨をとらへてはくそ笑む、カメレオンは北斗星に震ひ、スカンクはギターの音に踊る、犬はワン猫はミー、芋蟲は、さて、何んと鳴くらむ。」
と、妙なことを吟み上げると、チラリと貞子さんの方に視線を投げ、ペコンと頭を下げてサツサと腰を下す。

— 何んだいありや？ まるで動物園の判じものみたいな事をぬかしてサ。」
と、後の方の席にあるロイド眼鏡の男が、側の色の黒い男に囁く。

「ふん、馬づら詩人の春の嘶きだらう。」
「大體、あいつは氣障な奴だぜ。」
夕陽詩人は、どうも損な生れ性らしい。

「え、こゝにお立ちになつたのは、××新聞社のサクラ氏であります。」
武君が紹介したのは、でつぷりと肥えた中年のサクラ女史である。文藝部の婦人記者だが石ころの上に鐘詰がらを引きするやうな聲じガラ／＼と喋り散らす。

「— で、ございますから、私が始めて伊藤貞子さまのお名前を存じ上げましたのは、あの「ニロ」が上演になつた時でございます。社の命を受けてまして、小石川のお邸へ参りましたが、そのときお親しくお話をうかがひながら、私は餘りに

「お若いこのお嬢さまが——と、一寸驚いた程でございます」
 サクラ女史が、月並なことを一頻り述べた後へ立つたのは三文君である。三文君はグツとをつくり返つて

「え、このたび貞子氏の戯曲集出版記念會に出席し得ましたことは、私の非常に光榮とするところであります。劇壇の一角に突として現れ、女性の意氣を示されたことには、心から敬服し申上げる次第であります。つきましては、この機會に、私の考へてゐますことを、貞子氏ならびに皆さまに聞いて頂きたく思ふのであります。それを以て、この記念會の祝辭ともなるともにいたしたいと考へてゐます。」

と、グルリと場内々見廻したとき
 「ご簡單にツ。」
 さつきのロイド眼鏡が、チクリと一矢を飛ばす。三文君は平氣で

「え、從來私の考へてゐますことは、一体戯曲といふものは、どういふ立場から書かねばならぬか、といふ事でありませぬ。え、この戯曲は、演劇構成要素の一つとして見ないで獨立した文學と見るべきものではないでせうか。と申しますのは、劇場とか俳優とかを度外視して、戯曲を讀む人がその物語の一場面を、記憶と聯想とによつて立體化し、耳と眼との假感に訴へ、一脈の生命を傳へ得れば、戯曲としての任務は終るのではないかと考へられるからであります。だから、必ずしも上演を目的とする戯曲を書かなくともいふものではないかと思ふのであります。然しながら、これは一方の理論でありまして、これが絶対に正しいものではありません。現在の観客なり劇場なりへの戯曲を書いて、それ等のものと一緒に進んで行く、といふ事が大切なことであります。え、實は以上のことは八福氏のご所論の受賣りであります。いえ

なに、その違ふでありますか——」
 調子に乗つた三文君は、ウツカリ失言して到々種明しまでやつてのける。場内にドツと笑聲が起ると、すつかり狼狽した三文君

「と、とにかくこの記念記念會、いえ記念出版會、いえなに
 出、出版、記、記念會——のご挨拶であります。」
 と、しどろもどろになつてやつと着席。八福君は、ニヤリ／＼と笑つてゐるが、雨軒居士は眠つてでもゐるのか、以前のまゝの姿勢をすこし右に傾けたまゝ、ビリとも動がない。

「劇作家のアヤメ女史であります。」
 立上つたのは、混血兒のやうな顔した美しいアヤメ女史である。齒切れのいゝ口調で、然も極めて謙讓に

「——それで、たゞ個人としての私ばかりでなく、劇壇にとりまして、新しい方をお迎へ申上げることは、何よりの悦びではございますが、翻りまして、また一般女性といふ立場から考へましても、貞子さまはまことに、深い意義のあるお役目をもつてらつしやるのでございます。不才な私は、たゞほんのすこしばかり貞子さまより早く、世に出さしていただきましたのみで、格別これといふ何の働きも出来ませぬ。おはづかしう存じて居ります。これからは、貞子さまのよきご指導をいたさきまして、とも／＼に劇壇のために、専心精進いたしたうございます。」

アヤメ女史の挨拶が終ると、頭髮をオールバックにした顔色の蒼い四十餘りの男が立つ。これが翻譯家の知苦字君である。「わツ、わツ、わツ、わツ。わツ。わツ。わツ。わツ。」
 と、不意に奇聲を出したが、そのひどい吃りを知らない者は驚いたらしい

「た、たくしは、て、て、貞子氏の、ぎツ、ぎツ、ぎツ、ぎツ——」

クス／＼と、何處からか忍び笑ひが洩れる。

「そ、その戯、戯曲集が出、出版、さ、されましたことを、こ、心から、およろこ、こびまうします。こ、これからの、ご奮勵を、ねツ、ねツ、ねツ、ねツ——。」

口をモグ／＼さすだけで、一向に腰を下さない知苦字君を、とりなし顔に武君が立上ると

「ねツ、ねツがひま、ま、ます。」

と、突拍子もない聲で奴鳴られたので、ハツとしたらしい武君は、一たん腰を下してすぐまた立上る。

「よ、よ、よ、よツ——。」

と、知苦字君の吃りに、みんごと引きすり込まれながら

「豫、豫定の時間が參つて居ります。ではこれから、何もありませんが、ほんのお茶だけなりと差上げますから、その上でもつという／＼お話を交へたいと思つてゐます。つきましては、まことに失禮なことを申上げるやうではあります。暫くご休憩をお願い致します。實は、ご承知の通り、急に會場をこちらの方に變更すべく餘儀なくされましたので、準備その他、折角ご出席下すつた皆さまに、随分と不行届な點がございます。そのところは事情をお汲み取り下さいまして、悪しからずお含みをお願い申して置きます。」

參集者は、急に思ひ／＼の姿態をつくり始める。囁きが、笑聲が、波紋のやうに次第にひろがつて、やがて其れが混然とした不調和音のま／＼だん／＼と高まつて行く。席を立つて會場から消える者、カナリヤのやうに轉りながら、コンパクトを出して鼻つ柱をた／＼き始める女。色彩が、次第にあはたゞしく交錯するばかりである。

「オイ！—」

會場の出口の所で、武君の肩を後からボンと叩いたのはラガ

「君だ。」

「いよう！」

と、ふり返つた武君は蕃聲をあげて

「一到々やつて来たナ。ご苦勞さま。ラゲービーの優勝祝賀とは違ふから、君だけは來ないだらうと思つてたぜ。」

ラガー君は、ハンカチでちゆんと鼻汁を受けながら

「へん、ご婦人達を拜見に來たよ。夜目遠目といふことがあらね。皆んなシャンに見えるから妙だ。あれでも晝間見たら望遠鏡でのぞいた月の表面のやうに、でこぼこ面をしてやがるだらうナ。」

「これ、大きな聲を出すな。場所柄を考へて口をきけよ。」

ラガー君は洒々として

「司會者の體面上、これからシャンペンでも抜くのだらうね」

武君は言下に

馬鹿な。コーヒとケーキだけだ。ご婦人は甘いものがお好きだからナ。」

「な、なるほど。」

「とにかく、記念菓子を土産にやる。持つて歸つて少將閣下に喰はし給へ。孝行ぶりがい／＼と、毎朝の體操に多少は反應があるよ。」

「どうも有難ふ。だが、生憎親父は飲み助でね。甘い物と雨降りの郊外道路とは大嫌ひだとサ。」

「それがだね、菓子は菓子でも一寸變つたやつなんだよ。つまり、なま菓子を、貞子さんが出版なすつた本と同じ型、同じ厚味にし、上部に出版記念と赤く字を浮かして、さらに「ニコ」を暗示する爲め駱駝を一匹と、その側に貞子戯曲集と青字を浮出さしてゐる。これは僕の考案だがね。製菓技術を要するので、家の職人にその蘊蓄を傾倒させたんだ。君は何

んでも専門の偉大さといふ事を信じたがる人間だつたね。」
「蘊蓄を？やれ、やれ、君んとこでこしらへた菓子かい。き
はどい所で儲けてやがらア。」

「オイ、コラ、人聞きの悪い事を言ふなよ。儲けるどころか
損をしてゐるんだ。僕は親父から、小僧兼番頭兼職場監督を
命ぜられて、月給を五十五圓貰つてるが、その一ヶ月分を棒
にふつて造つた菓子だぜ。ところが、到々三十圓餘りすり込
んでしまつた。尤も、貞子さんの方から、一切の費用は出し
てくれることにはなつてゐるが、といつてこれは僕が望んで
やつた仕事だから、まさか貰ふわけにもゆくまいよ。洋服を
一着こしらへる豫定でゐたのがフイになつちやつた。」
「菓子をつくれれば、惱みははてなしか。ハハハハツ。」
「菓子君は、到々笑ひ出すと、そのまゝ行つて了ふ。」

東側の窓の近くでは、蛙面君と夕陽詩人とが話してゐる。

二階ですね。なるほど、いや氣にかけてゐませう。」
「北向きの窓は、あれはいけませんですナ。それから、犬を
飼つてる家はいけませんですよ。」

夕陽詩人は、また轉居でもする心算か、蛙面君に頻りに家の
事を頼んでゐるやうだ。
すこし距つて、舞臺装置家の鱈鮫君が、長い鼻髭を撫でな

がら榮錢君と話し込んでゐる。

「君、一寸見給へ、あすこに五、六人集つてる、あの向つて
一番右の端にゐる娘さんが着てゐる着物の柄！ いや、色彩
だね。なかなかいゝ。」

榮錢君はヤヨロ／＼しながら

「懐古趣味らしいが、あゝいふ味は油桐では出し難いな。」

「僕は大阪の文楽の人形を一度みたことがあるが、あの着物
から受けた色彩の美は今に忘れられないよ。日本の女の顔は、

奥行の無い平面な舞臺と同じだから、色彩の照明をかけない
と立体感がなくて駄目だね。顔面だけにサスペンションライ
トをかけたつて、舞臺効果はありやしない。」

鱈鮫君には、女の顔が舞臺にでも見えるのだらう。
婦人達は、平面な舞臺づらを並べて、あつちこちで勝手放
題に嘸舌りまくつてゐる。

一肩の張らない、氣持のいゝ會だわね。」

と、春の高い日本服の一人が言ふ。

「貞子さんは、いつ見てもお美しいわ。あたしも、あの方と
同じ年の二十三だけど、何から何まで、まるでアルファから
オメガよ。」

美容院で、時間人形になり、パーマネント、ウェーブをつけ
たらしい羚羊のやうな感じのする女が、じろりと向ふ側の方
を見て

「あ、ちよいと、あんた あすこの洋装の方は、さう六セ
ンチか七センチ脊が高いといゝわね。」

すこし離れてまた一團
「——だめよ。断然だめだわよ。」

と、口をとんがらせてゐるのは鱈甲眼鏡を光らした断髮娘だ
「いゝえ、それはその人の嗜好にあるので、理窟では通らな
いことよ。丁度、藝術を理窟ばかりにあてはめやうとする低
能者流に似てるわ。」

躍氣になつてゐるのは、色の黒い健康さうな顔の、眼の涼しい
質素な和服の娘である。

「ノン！ノン！愚論ね。キャベツにお酢なんかをかけて、そん
なもんのデンやベルモツトのおさかなにはならないと思ふわ。」

ゲーテが諷刺したやうに、「本を讀まうと、實際に手にしたの
は、一冊の料理本」これが賢い男を幸福にすることださうだ
が、争つてゐる女達も、これだけは知つてゐるつもりだらうか」

「アラ、あれ廣小路さんね。」

と、どこかで一人の女が呼ぶと、周囲の者の視線がサツと會場の一隅を追ふ。なるほど、やゝ急ぎ步調でスツと這入つて来たのはミミ子クンである。ミミ子クンは、サクラ女史と何か一言二言話したかと思ふと、すぐまた會場の横手のドアを開けて消えて行く。

其處は、會場とは區切られた休憩室になつてゐる。

「ま、ミミ子さん！」

貞子さんが、椅子から飛ぶやうに離れて、這入つて来たミミ子クンに近寄る。ミミ子クンは、雨軒居士と八福君とに挨拶すると、すぐに貞子さんの手を握つて

「貞子さん、お芽出度う。すみませんでしたわね。こんなに遅くなつちやつて。」

「ありがたうよ。あんた達のお蔭だわ。あんたが餘り遅いから、もう駄目ぢやないのかしら、と思つてた程よ、よくいらしたわね。」

「いろ／＼と準備に追はれて困つてるのよ。今夜は、氣をつけてゐただけど、そんな都合で、時間を見てビツクリして駈つつけたの。」

「ま、ほんたうによくいらしたわ。」

八福君が、体をねち向けるやうにしてミミ子クンに

「先日、鈴風さんから一寸お話を聞いたのですが、ご都合でフランスの方へ行かれるさうですね。」

ミミ子クンは元氣の無い聲で

「え、鈴風先生が、倅ひあちらの娘さんの所にいらつしやるので、明後日と一緒に参ることに決定いたしました。來月の初旬頃に出發の豫定でりましたけど、急に豫定を繰り上げまして、シベリア經由で、モスクワに行き、鈴風先生と對外文化連絡協會を訪ね、すこしソヴェートの見聞をひろめるこ

とにご相談したのでございます。」

「あ、ウオクスですね。いゝお考へですよ、組織立つた見聞を得やうと思へば、何よりウオクスの世話になるのがいゝんです。やはり繪の方のご研究ですか？」

「いゝえ、あたくし、少し考へることもございますので、繪の方は今度を潮時に退きたいと思つて居ります。フランスへ参りましたら機會を見て、何か別な研究でもしてみたいとも考へて居りますけどー。」

「ほう、心境一轉ですね。だが、いま畫壇を去るのは、實に惜しいなあ。」

この時、樂錢君と三文君とがドヤ／＼這入つて来る。樂錢君は大きな聲で

「や、ミミ子クン、来たナ、今朝の事だよ、×展の審査員の楓梧さんに會つたら「廣小路子爵も到々折れてミミ子さんの勘當を取り消した」と言つてたが、ほんたうかね？」

ミミ子クンは氣が無ささうに

「え、ま、そんなことになつたのよ。」

三文君が恐る／＼横合から

「どうでも渡佛するんだね。」

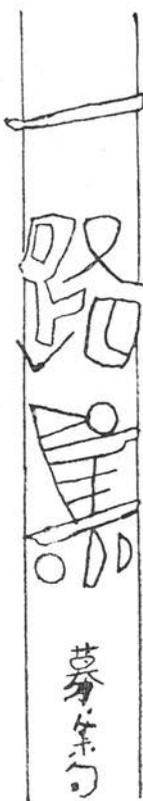
「え、こちらにゐたつてつまらないし——伯父から旅費だけ融通して貰つたの。」

「さあ？二年向ふか五年向ふか、あたしにも判らないの。このまゝ一生、或ひは日本に歸つて來ないやらも——。」

と、ミミ子クンの語尾がかすれる。今迄、黙々として煙草をくゆらしてゐた雨軒居士は、妙にゆつくりとした口調で

「廣小路さん、先日もお話した通り、あちらへ着いたらすぐルソウ君をお訪ねなさるがいゝ。何かの力になつてくれるかも知れないからね。わたしからも、一言にか書いた上げま

嵐



關本雅幽選

電燈の明滅しげく嵐の夜紫雲
 昨晚の嵐へ腕を組んで居る白峯
 ひそやかに嵐の前の愛の巢の蒼太
 灯の街を抜けて嵐に慄えてる耕民
 嵐に立ちて糞虫をうらやむ湖山
 栗落ちる嵐を聞いて子の早寝勝二
 女中の脊で嵐を歸へる幼稚園白菊
 雨風去つて子供の水遊び谿巖
 嵐止んで夜は静かな雨となり祥月
 燈臺が巖然と立つ夜の嵐山月
 何思ふ小鳥嵐へ斜に飛び錦石
 陽は落ちて村は嵐につままれる永樂
 農場の嵐の朝に草臥れる龜吉
 希望なぞ聴くな嵐の前夜なり正路
 病床の友よ嵐の夜を好み岩石
 嵐をものせす情話ナンク柳夢
 嵐それは自然の更生よ禿山
 嵐吹けく俺に今宵は酒があり生調
 保線課の窓を嵐が打つてゐる佐一郎
 嵐とはなりぬ仔犬が鳴いてゐる夜食子
 蜘蛛の巢に危懼思わせて嵐ゆく朴甫
 颱風の恐れみんなは寝てしまひ夢裡
 避難港嵐の夜を酒に更け法泉水
 嵐を突いてゆく兒童の眞面目さ孝男
 工場の氣笛絶えく嵐の日の助
 哲學書嵐の中の読み應へ白花子
 孝行へ嵐はいつか晴れてゐる元山
 連日の嵐をかこつ漁師町孤鶴
 青嵐袋めてビールの冷え加減鯉友
 耳遠き祖母もゐる嵐の驚怖葉光
 嵐の夜早うしもうて寝るとする方眠
 宮の森嵐の朝へ倒れてる悟久
 暴風雨に見舞われと言ふ人の顔立坊
 あの雲行きは嵐だと知る平社員義郎



西之町 MEMO

雨 緑

▼本年は我社にとつてかなり多事であつた百號記念を祝する爲朝日會館で川柳の夕、百號記念號出版、百號記念會、加茂川會等々で日本柳壇へ大なる刺戟を與へました、更に昭和八年度は本誌十周年記念を祝するため記念計畫を十一月八日夜本社俱樂部で在阪の同人、社友會を開催致しました。當夜出席者は、路郎先生、山雨樓、町二、琴人、新水愚陀、里十九、かほる、豆秋、變人、夕鐘、鶴峰、京郎、水車、八步、禿山の諸君と私當夜の出席者一同に前月より入社された奥野禿山君からシャトーパへの寄贈がありました。

▼同人庄萬よし君は陸軍大演習に十三四日の兩日軍服姿で従軍されました。

▼同人福田山雨樓君十月廿四、五の兩日に亘つて鐵道職員の慰安會のため名古屋へ出張されました。

▼本社の主催で小松町(石川縣)大火川柳家慰問川柳會を十一月十八日夜催しました當夜多數の出席者があり會場がせまくて行届かなかつたことをお詫び致します。これは少しでも多く慰問品を送りたい微衷から會場費の安い處を選んだ譯ですから御寛容の

避雷針嵐の空にさりげなし 憲坊
 電線がうなり子供も寝ずに居る 四五磨
 救助船嵐の中に聲がする 富美三
 嵐にもなつて口實出来る旅 南葉
 仁丹が黴いて嵐がまだ止まず 華水
 断落ちが嵐の中に消えてゆき 巴調
 嵐にもまれこんな男になりまだ 柳人
 嵐とは別に元氣な終電車 水車
 ほろ酔ひにちと強すぎる嵐なる 阿鴻
 人生の一ページかや嵐吹く 水郎
 嵐の夜我が家ながらも鬼氣迫り 淋天
 お隣のたらひが落ちた嵐の夜 虹一
 嵐止み番僧靜かに庭を掃く 一柳
 秋の庭嵐が恐い花が咲き 今雨
 麗人がどうかなすつた小夜嵐 竹稚
 うそのよな嵐の朝の松葉かき 貴志子
 昨晚の嵐が石の素地を見せ 才兒樓
 男性をはつきりせよと朝嵐 吉祥
 外燈が見えかくれする嵐の夜 曉童
 干物が濡れるがまゝにある嵐 富士雄
 嵐の夜假面の女あわてたり 麗光
 嵐を斜めに電氣時計はつきりし 白扇
 山の小屋嵐にもつてゆかれそう 玄絃堂
 もつとく吹いてくれ！嵐 馬骨

飲んで寝れば嵐もなんのその 北陽子
 嵐まだ狂ひつくせず雨を呼び 荷千
 東山嵐に明けた色になり たいけ
 阪妻は嵐の中で汗を拭き 同
 小夜嵐もう處女ではありません 利生
 因業な爺へ嵐の吹きもせで 同
 泰然と嵐の中の大樫 鐵吉
 嵐さて頬の尖りを知らざるか 同
 青嵐蒲團かむつて蚊帳の中 青兒
 父歸りしか母歸へりしか嵐の夜 同
 大嵐大地へ喰つてかゝるやう 白丘土
 鶏小屋が少し氣になる嵐の夜 同
 警笛を奪つて嵐荒れ狂ひ 鴉天
 こうろぎの死體嵐の去つた庭 同
 哀傷を拾ふ夕べの嵐なる 靜太
 鳩時計二時を告げる嵐の夜 同
 我儘が過ぎて淋しく嵐さく 明珠
 面白く嵐を見るは硝子越し 同
 佳句
 太棹がどつしりとある宵嵐 收
 嵐嵐電線工夫の灯が走る 白扇
 巴風いで連絡船の雑沓 紅
 鶏がつゝいて歩く嵐跡 笛秀
 嵐から朝へ残つた顔二つ 春秋

程み願ひます。

▼小松町大火に際し本誌の愛讀者 本田柳一路勝山しとの兩君が頼焼の厄にあはれました同情に耐へません。

▼川柳者葉松の主催で十月廿九日夜東區三光神社で小松大火川柳家慰問句會を催されました。出席は廿數名本社から琴人、かほる新水、艸樂、里十九、豆秋、水車、夕鐘、みつるの諸君と私が出席致しました。

▼社友平井若太君は近く友人とで雑誌「まにあ」を月刊で發行される由、大いに發展を望みます。内容は民俗、風俗、を主として四六版廿頁和紙和裝の雑誌で社友石曾根民郎君の印刷だそうです。希望者は滋賀 甲賀郡寺庄村字寺庄 同君宛に申込れたし。

▼社友大西八歩君は商用で金澤方面へ赴れ大火の小松町へ下車されて、頼焼された前社友本田柳一路君の外數名をお見舞されて歸阪された。

▼神戸支部から支部機關誌「川柳ひらめき」の九號が(四六版)刊行されました。本誌から贈寫版が活字になりました。

▼社友平岩司郎君は十一月十六日御親閱の分列式に同志社大學から選ばれて來阪されました。

▼社友日野華水君は十一月十三日箕面森林公園から左の句を寄せられた。「振りかへるとこ友西村明珠君は十月廿日勤務先の社から笠筒奈真方面へ遊ばれました。句に「笠筒山國史をならふ子を連れて」

失業者嵐の中に働きぬ 同
嵐は晴れた雀チウ〜 志紗堂
あられない姿で嵐の迎え傘 貴志子
嵐の夜側の戸が開いたまゝ 秋生
嵐の灯またたきながらよく懐へ 荷千

懐手

失業と懐手

失業の計劃もなし懐手 青兒
緊縮の犠牲となつた懐手 浮壺
屋内の懐手

御用聞或日懐手からかはれ 憲坊
懐手の兄が来るので里が 知れ 笛秀
號外の利下を覗く懐手 佐一郎
懐手おかすの香かぎに 來る 慈雨來
宿直の炭邪魔臭い懐手 紅童

途中の懐手

懐手足で何かを描いてゐる 曉夢
的もなく唯徒然に懐手 巴調
懐手して相場から戻つて來 馬骨
懐手思案もつかず家につき 銀波
逢ひに來て逢へずに歸る 懐手 おさむ
好きな妓に傘させられて 懐手 寄舟
寒さうに歸を急ぐ懐手 祥月

中澤濁水選

(人)蒲團あちこち嵐の夜 里十九
(地)嵐岐阜提灯が消えたまゝ 吉祥
(天)病院の嵐夕オルが落ちたる 靜太
(軸)棄てた猫が戻て來る嵐の夜 雅幽

教會を出て寒空の懐手 耽翠
懐手牛の車を足で押し 收
懐手嬉しい唄を口ずさみ 悟久
懐手口笛で行く佐渡おけさ 富美三
口笛を吹く懐手土佐を連れ 休天
懐手へ犬が吠えてる午前二時 永樂
懐手女給に聲をかけられる 志紗堂
懐手意外な人に名を呼ばれ 寄舟
共鳴も出來て二人の懐手 麗光
懐手友と別れて當もなし 阿鴻
君も來い僕も行くよと懐手 白峰
懐手どうにかならう友の後 竹雅
懐手素足で歸る近火なり 葉光
懐手文士は想へぶらつきて 白花子
懐手床屋へ遠い顔で行き 織吉
貳拾圓金貨をさげて懐手 永樂
懐手白い花咲く草と知り 春秋

▼川柳會大佛の會を春秋、明珠、いよ子、耕人、秋彦、青刀子、寄舟の諸君が、集つて創立されました。

▼富士野鞍馬君十月廿日朝鮮金剛山から左の句を寄せられました「金剛の 秋を日本の長襦袢」

▼舊社友河野夜玉君は近く、短歌の田村氏併人百深、愛涼の諸氏と共に、文藝誌を發行される由川柳社會化のため誌上を割愛されることを切に望みます。

▼中村要作君は(俳人)本誌の創刊號から讀者であります、十月上旬から病臥されてゐます、一日も早く全快を祈ります。

▼小西無鬼君が關西土地句會を久しく開かれないのは住宅博覽會やその他でとても忙がしい日が續いたためであるそうです。一日も早く句會の復活を望みます。

▼宮内耕朗君は松山から臺中市へ移轉されました。柳友のない臺灣は淋しいと言つて來ました。

▼森本黒天子君は、南海鐵道の深日驛長から東住吉驛長に榮轉されました。

▼律子くらま會 富士野鞍馬君主催で十一月廿二日東京濱町明治座で、女優森律子の藝術美を觀賞されました。

▼川柳號は、大正元年十一月創刊され二十一卷まで刊行されましたが十一月號を以て終刊號を發行されました。

▼罹災者慰安の夕から(小松町)寄せ書が届く柳村、青嵐、草刈、玉水、井々樓、思介郎、萬魚、松水、兎月、白山坊の諸君。

懐手師走の風へ思案めき 正司
懐手思案に暮れた街を行く 水玉
懐手世間は寒う暮れてゆき いの助

商賣と懐手

懐手男に用のない市場 没食子
懐手冬の夜寒はつまらなし 同
懐手花を賞めてる夜店の灯 幸村
植木屋へ買ふとは見えぬ 懐手
買ふ様で素見かす振の懐手 生朗
懐手人が買うたら買ふ氣なり 松之助

釣る氣でない懐手

また一人魚釣へ立つ懐手 菊路
懐手大公望へ聲をかけ 錦石

飲む懐手

左手は懐にある二三杯 雷兒
懐手一杯飲んで行くと決め おさむ
懐手天下泰平千鳥足 笛秀

話す懐手

懐手同志符帳で話してゐる 水郎
味な事やりをるなあと懐手 里十九
重役の威厳を見せて懐手 紫雲
待たせたを應揚に聞く懐手 夢裡
懐手子分の話聞いてゐる 青兒
懐手自力更生聞いてゐる 耕民

黙想と懐手

懐手戀も理想も無い如し 方眠
久々の雨と氣樂な懐手 葉光
懐手無心の文句考へる 秃山
若き日をふと思ひ出す懐手 胡蝶
懸賞をあてにしてゐる懐手 明珠
懐手煙草賃にも困つて居 方眠
物思ある姐さんの懐手 虹一
懐手さて我輩は如何せん 秋生
懐手ドツコイショと起ち上り 利生
押賣にむつとして来た懐手 松之助
貰はんとする懐手

香具師と懐手

出し抜けのピラへ慌てた懐手 史録
懐手ニユツと出したが時おそし タカヲ
香具師ももう顔を知つてる懐手 菊路
懐手顎で詰手を考へり 正路
辻將棋やをら手を出す懐手 玉兒
懐手三四の勝を知つてゐる 靜太
懐手下手に勝つてもつまらなし 春秋

經濟と懐手

店で見ると失意得意の懐手 耕民
儲からぬらしい返事の懐手 南葉
懐手とても工面は出来まい 法泉寺
懐手目論見だけの今日も暮れ 貴志子
懐手あれで三分は損するか 元山
得のいく方へつく氣の懐手 とし

▼本社松江支部誕生一周年句會から寄せ書
春期、郁之介、法泉子、粹浪人、柳人、與
詩、喋郎、水穂、葦秋、鐵花人、三雷波、
一宵、田鶴緒、歌々面、九紫、美村、大鳥
綠之助、源五郎、玲人、卷二の諸君。

▼六文錢川柳社の第二回 縣下川柳大會から
の寄せ書、呑風、柳兒、有爲郎、可醉の諸
君外廿五名の署名あり。

▼川柳の菊の會からの 寄せ書、綠之助、羅
門、美村、汀雨、鴉天、柳風、文泉、比佐緒
季美、田鶴緒、美登利草の諸君

▼私は鄉用で十月廿三日午前八時五十分の
列車で郷里へ赴く、途中岡山の金光教の布
教師に行つて、辻井柳鳩君、小山大火で類
焼されたので同じ列車で歸郷されてゐると
米原驛で出合ひ、類焼された川柳家の事や
柳談に耽りながら小松驛まで同乗したが驛
から見た大火の煙はまだ消えず實に悲惨な
もので、柳鳩君や多数類焼された川柳家の状
況を思ふて涙ぐましくなり、下車するだけ
の時間がなく、御見舞にも立ち寄れず残念で
した。翌廿八日夜八時五十六分金澤發の列車
で歸阪の際紙谷北陽子君が、わざ／＼見送つ
て下さつたそうです未見の人なのでお目に
かゝれなかつた。

▼瀧澤馬琴の八十五年祭及展覽會が、上野松
坂屋で開催され、その委員の一人であつた坂
井久真伎翁から深光寺藏版の繪ハガキの寄
贈をうけた。

▼川村花菱氏が、この稿の校正中に來阪され
路郎主幹へ通知があつたので、早速、宿へ電
話されたところ非常にお急ぎであつたと見
え、昨夜歸京されたとのことで主幹が残念が
つて話された。それは二十五日のこと。

懐手また算盤をいじつて見
懐手小金も出来た風評なり
懐手あれで儲かる腕を持ち
義郎

十 客

懐手何か刺戟の欲しい顔
他人には皆職がある懐手
懐手やつぱり俺が悪かつた
爪先の刻みに見るふところ手
懐手何か考あるらしい
考を元へ戻して懐手
懐手此神様も流行らない
春秋

情 熱

情熱と歡喜へ靴の音高く
情熱へ自制のこころゆるみがち
だあまつて見つめる眸もへて
情熱のひた／＼と雨をつき
情熱がたれたちぶさのような秋
情熱を感じてだるい右手左手
情熱へ彼の女の親の許さず
情熱の瞳へ障子冷へてくる
情熱へ今宵の星の冷めたすぎ
情熱の詩人酒場のでん居り
君知り給はぬ情熱胸を抱き
情熱な手紙へ彼の苦笑ひ
敏ふかき情熱少年怖くなり
情熱の手に微笑めるふろまいど
浮壺 阿鴻 鴉天 湖山 義郎 小松園 銀波 曉鳴子 鐵吉 いの助 白扇 元山 葉光 水郎

好い事があるのか笑ふ懐手
懐手道頓堀へ来てしまひ
懐手急に用事の足になり
華水
（人）懐手先祖へ濟まぬ事が出来
たけを
（地）新妻の針の動きへ懐手
胡蝶
（天）懐手肩が淋しい父なき子
白扇
（軸）名案もなく親類の懐手濁水
○遷後感……類想同位と認めたるもの最も
多く、次に懐手にそまはぬもの、懐手
の説明に墮したるもの、あまりに平凡な
ものなどあつて、遺憾ながら六一七句を
没にしたことを謹謝致します。

水 谷 鮎 美 選

寂寥へふと情熱のベンが觸る
タカラ
情熱の乳房ははつていたむなり
錦石
情熱をいつそたかめて秋の夜
伊勢子
情熱の言葉廣告欄にあり
みゆる
情熱へネオンサインが黙してる
耽翠
情熱は大蛇のような点になり
紅
情熱の一文なしになつてゐる
祥月
情熱をかくすかなしき道化役
明珠
ほとばしる情熱涙とはなりぬ
白花子
情熱の瞳へモデル冷めたすぎ
胡蝶
情熱のうつる半襟赤くして
法泉子
情熱を細字につめて手紙くる
寄舟
情熱の虜となつた若さなり
利生
情熱の狂ふ心となつて宵
たし路

年 賀 廣 告 募 募

▲岡田三面子博士が滿洲からの歸途、築港で
上陸される旨、藤里始古君まで通知があり、こ
れ又楽しんでゐたが、遂々お目にかゝれず仕
舞であつた。
▼大島清明氏は近來多忙を極め、殆んど大連
新京間を飛脚のやうなうそがしきで往復さ
れてゐるさうです。同氏選句が本誌にも掲載
出来なかつたのは全くそれが爲です。選句は
本誌編輯後に到着いたしましたので、次號に
は必ず掲載いたしますから御諒承願ひます。

來るべき一九三三年は日本柳壇に於け
る最高權威たる「本誌」創刊十週年に相當
いたしましたので新春號をもつて十週年記
念特輯號を刊行することになりました。
茲に光輝ある歴史を記念するため
年賀名刺廣告を擴大して川柳家名簿
たらしめたいと思ひます斯界のため又本
誌御援助の意味で川柳家諸兄ごぞつて御
申込下さるやう特にお願ひ申し上げます
掲載料 一口 **金五拾錢**

一人で幾口でも申込んで下さい。
一口分の原稿は住所氏名限り。
連名の掲載の場合でも一名一口以上の事
一頁御希望の川柳家には特に金七圓半頁
は金四圓の特別割引をいたします。
◆**由込期間** は十二月十日迄
新巻名刺特別に掲載

川柳雜誌社

大阪市住吉區平野西之町八三

情熱を女給ソフアーにはづまで
 情熱の瞳をふせてゐる膝がよれ
 接吻も許したふたりだけの部屋
 情熱の夢見る夜のつゞきけり
 情熱の燃へては消ゆる紅い灯ぞ
 グリーンのネクタイにこゝ情熱
 情熱のいつちしまひの寝汗なる
 恩師にありし日の情熱よ
 嵐々マダムの頬の情熱よ
 情熱にびんくのりばん軽くゆれ
 情熱の瞳残して今朝の旅
 寄りそうておれば泪になつて
 獸人の眼がせまる 日の乙女
 情熱をいつそそりし小糠雨
 情熱になりさる唇を大きく見
 情熱の頬にさびしき皺があり
 情熱の今日の無口がさびしくて
 居くづれた膝の情痴に大年増
 情熱の窓は嵐になつてゐる
 情熱へ偉人の顔がさびしすぎ
 情熱へさびしくともる港の灯
 集合らつばへ情熱のさようなら
 情熱へ美しき雲ながれゐる

佳作
 情熱の紅ばらの花みつめたり
 情熱のクインヘちびるはいひ

燈羊子
 今雨
 白菊
 方眠
 蒼太
 馬骨
 没食子
 秋生
 曉童
 雷兒
 沐天
 同
 同
 勝二
 同
 同
 幸村
 同
 正路
 同
 青兒
 水車

幻に見ゆ情熱にむせかへり
 情熱が押しの一手にあらはれる
 情熱へ夕べ祈りの鐘が鳴る
 情熱に疲れてからの白い菊
 情熱にまかせきりたる骸なり
 おのゝいて情熱のなかに生き
 情熱の涯哀愁へ續く影
 鉛筆でかく情熱のはしり書き

秀吟
 大空は澄めり情熱の殻を抱く
 情熱へ笑ふことをば忘れてゐ
 月光を浴び情熱の泉を汲み
 拒まんとして情熱の眼にあひぬ
 情熱のワルツよ息が間近なり
 燃ゆる瞳の君のうなじの白き
 情熱の離愁の闇にうちしづみ

人位
 情熱のコンクリートの壁に寄り
 情熱は若い燕で油ざり
 消すべくもなき情熱のふたり
 ストープの火に獸性の艶となり
 情熱の瞳のくろすんでゐる

天位
 部屋中が塗りつぶされる情熱よ
 (軸)愛情の埒塙に惱み消へざり
 (同)ほろにがき酒情熱にとけく

四五磨
 岩石
 佐一郎
 耕民
 貴志子
 華水
 白丘土
 富美三
 機見女
 北陽子
 麗光
 春秋
 十三絃堂
 史録
 ゆきさら
 夢裡
 玉兒
 荷千
 勝二
 靜太
 吉祥
 鮎美
 同

前號正誤

十頁 萬歳師怒氣を含んで見せもする。大門
 四六頁 信用と金の工面が別になり。晶水
 四七頁 男盛り女盛りにおくりたり。晶水
 四八頁 鍋の脚一つとれたをまだ使ひ。紫石
 四九頁 みもちして女給の癖の髪。山雨樓

改號

▼岩垣奇可愛君は日本村 ▼新堂勇君は喜正
 ▼真田泰典君は幸捐 ▼清水友坊君は友帆と
 何れも改號されました。

新誌友

(七年十一月廿六日まで)

(川柳雜誌) 前金半年分壹圓八十錢以上拂込
 の讀者を誌友として、こゝに芳名を掲載致し
 ます。何卒新讀者を御勧誘下される様御願ひ
 申します。御紹介下される方には川柳雜誌の
 近刊を見本として差上げますからお申込み
 下さい。(縁雨)

上久保まさる、川村親月、樋口坊茄子(梅田支
 部)長崎義順、藤田道太郎、内藤業太郎(長崎
 柳秀)中尾南陽、馬淵昌水(藤田紫石)野添俊
 二、山本政夫(吉田勝春)加藤利一、林茂(鶴支
 部)古市庄一(福田山雨)まねき東店(小寺
 鳴玉)山本彌三郎、喜多春秋、松井真佐(江戸
 みつる)牛菴好夫(松盛琴人)小西無鬼、増田
 耕民、北澤契装雄、吉井茂代、須藤清、田部英
 三、駒田白帝子、村野健雄、藤田紫石、服中
 光子、花房南葉、竹原(久本社事務所)括弧
 内は紹介者
 ▼本誌の編輯は路郎先生、町二、山雨樓、
 琴人、鶴峰、の諸君と私とで本社事務所
 致しました。

機 械 の 眼

— 前 號 近 作 柳 樽 一 り —

松 丘 二 町

前號近作柳樽から目についた句を左に
擧げる。

新 水 雅 幽 愚 陀 鐵 洲 杏 三 同 華 水 二 南 民 郎 同 晃 卓 司 耶 大 門

たゞ憎い男に酒を呑まされる
生活難子は逆立ちをして遊び
なかに日向で棺桶を考へてる。
栗の實の様に居るさへ許されず
佛像の指に流れしエロチツク
秋空をする。切つてビルディング
止めるだけ止めて風へ傘を貸し
運刻して煤降る街に氣が咎め
オートバイ金を返しに来る夜霧
木の肌の片つぼ濡さあるころ
あちら向きこちら向け共秋の風
パスよるのビルディング風景
腸にお通夜の酒が洗んでゐる

さびしき視線に蛙が息吹きかへす
ひるふかく枕の影の憂鬱よ 同 羅 門
犬鳴いて血を啗く夜をさみしくす 愚 籠
よき言葉なみだながして讀みぬた 同
父と共に野良へ行かして泣き 天痴人
金貸した弱みはるく取ら来る 翠 峰
忍び泣く聲もかすれて土の秋 虎 徹
私はいま、路郎師の所謂公平な正確な
狂ひなき選句機械が、数千の句から選び
出した三百二十四句のうち、右の二十句
を抜いてみた。この時私の選抜は、私の
好みの赴くがまゝに行はれたので、選に
ついて何等の制肘も受けてゐない。従て
私にとつては、頗る良心的な選であると
共に、一方甚だ不公平な選であると云へ
る。恐らく十一月號の柳樽中、これだけ
が佳句だと云つたら、大抵の人々は異議
を唱へるだらう。この選抜に満足するも
のは、或は常人の私一人かも知れない。
併し少くとも私にとつては、この選は正
しかつた。といふ意味は、これらの作品
の鑑賞に當つて、私は色々な周囲の事情
に累されることなく、十分に欲情的であ
つたと同時に、甚だ我儘でもあつたから

だ。選に我儘であるといふことは、選句
の準度として、選者の主張と川柳觀をそ
のまゝ尺度として取り上げた、といふ意
味で、この尺度の欲するがまゝに行へば
その選は、その選者の鑑賞能力の正確な
計量表であると共に、作家に對する挑戦
状でもあるのだ。
だが、今日かうした選句振は、多くの
場合許されない事情にあるし、選者とし
てもいさゝか無責任だとも云へる。たと
へば句會の選についてみる。若し現在の
句會で、傾向の違つた各選者が、各々の
好みの命するがまゝに選をしたなら、句
會は、神聖にして公正なるべき作句道場
の意義を失つてしまふ。選者はいきほ
その好むと好まざるとに拘らず、選句機
械たらざるを得ぬ。——限られた短時間
に公正な選をすべく、自我を殺して額に
汗することは、一面貴い仕事であり、一
つの修業でもある。——かくしてふるひ
わけた句について、僅かに選者の好みを
満足せしむべく、三才五容の制度が行は
れてゐるのだ。私は私の選句に天地人を
つけて披講するとき、自己慰安のほろに

がきを甘受する。「私は私の選にはんのかよつぶり甘へさせて貰ひました。選句機械のさゝやかな我儘を、作者諸氏よ許せ」と 三才五客を選者の僅かに許された好みの表れとみる私の考へ方は、私自身が選者である場合の感想であつて、決して他の選者の氣持を忖度するわけではない。だから私は、たとへ私の選に三才をつけても、これに他の人々の共感を期待しない。人々には人々の眼がある。尊敬すべき作家達の「藝術の言葉」である川柳を、その優秀を、私の貧しい鑑賞の能力で貫き得たと信するほどの勇氣はない。それにも拘らず敢て三才をつける所以は、至難なる公平を強ひられて、自我を殺した選者の、一つの良心の表れでもあるのだ。

では、天地人制を私は認めるのか。然り、現在に於ては認めざるを得ない。だが、次の二つの場合に於て、句に等級をつけるなどは、全く無意味なことである。

(A) 古川柳のやうに作者名を必要としないうほど、見事な没個性の句のみが提出さ

れた場合——此時選とは、豆の撰り別けと異るところはない。大豆や小豆に天地人の區別をつけて喜ぶのは、狂人でもしないことだ。(B) さきに述べた選者が自分の好みのまゝに自由な選をした際——これは普通の句會や募集題吟の場合には稀有のことだが、たとへば自分の自選句集を作るときとか、一旦選を経て發表された句について、勝手にシルシをつけて行くとときとか、等々。この後者の場合に當る私の初掲二十句について、たとへば

(人) 栗の實の枝に居るさへ許されず
(地) 木の肌の片つば濡れてゐるころ
(天) 犬鳴いて血を咯く夜をさみしくす

の如く等級をつけたとしても、私以外に何の意味を持たう。大多数の人々は、ひどく獨りよがりな選たな、と思ふであらうし、恐らく選はれた作者自身も、この句は自分としては決していゝ句とは思つてゐないのにと苦笑するかも知れない。併し私自身の鑑賞眼にとつては、決して偽りはないので、若しいけない點があるとすれば、それは自分の好みにかく等級をつけたらう。

以上は主として題吟の場合を頭においての話だが、それが雑吟となると、殊に本誌の如く、各作家の性格と獨創性を貴ぶ場合、選者は精巧な選別機械であると共に、一個鋭く生きた眼でなければならぬ。我が近作柳樽が路郎師を必要とする所以である。

例により甚だ我儘な筆を陳謝する。只一言附加することを許されるならば、私は今までの選に當つて、句に等級をつけないことが多かつた。それは私が公平な選句機械であらうとつとめた結果ではあるが、決して集つた句を小豆並みに取扱つたわけではなかつた。天地人制絶對支持の人々の眼からみて、天地人の決定に對する責任の回避、短時間に決定し得る能力の不足、選に對する熱情の缺除、等々の悪徳の何れにも相當する私ではあらうが、私もまた、その場その時の微妙な心の動きに支配される一個の生き物であつたといふことを、諒恕して頂ければ幸である。

前置きが長くなりすぎて、肝心の句評の頁がなくなつた。いづれ次の機會に筆を改めて見えることにして、一先づ筆を擱く。

各地柳壇

＝れ割を句るあちのい＝



聖駕奉迎句會(本社)

十一月四日夜

於ちとせ俱樂部

長くも聖上陛下、聖駕を浪速の地に進められ、親しく大演習を続べさせ給ふ日の旬日に迫れるこの日、聖駕奉迎の句筵をちとせ俱樂部に謹催した。當夜は作句の昂奮に肌汗ばむほどの暖さであつた。先づ奉迎の句を謹作、續いて新しい試みの一つとして、山雨樓氏の勞を煩はし、席上募集雑吟の互選入選句のうち、三點以上の句(本號發表)につき、路郎先生の句評と選について、講評があつたが、齒に衣させぬ御批評振りには、ズバムと云ひ切つて、痛快味を覺えさせられた誠に當夜の收穫であつた。琴人氏また「菊の雫」と題する句會尊重の意圖になるパンフレット第一號を出席者一同に配布され今後毎句會毎に發行されることになり、山雨樓氏のプリントと共に、我社句會の一特色となるで

あらうことを期待させられた。散會十時半。

(出席者)

路郎先生、綠雨、角丸一笑、變人、春秋、鶴峰、溪花坊、耕之介、豆秋、琴人、閑子、山抱子、默平、八步、鮎美、水車、里十九、松之助、銀波、詩郎、三郎、夕鐘、沐天、禿山麗光、かほる、町二、勝二、えいひ、いわ夢裡、素月、雨少、影秋、鬼丸、おさむ、秋無草、雞牛子、掉二、無鬼、山雨樓、万よし鳥悟、青踏、北人、九文錢、あや美、鶴足、白柳子、華平

聖駕奉迎路郎選

天皇旗肅々として攝津晴れ
奉迎へもうそろばんをかたづける
奉迎の町に白菊黄菊の香
謹んですれ〜に飛ぶ奉迎機
聖駕奉迎ラヂオの線が揺れてゐる
奉迎に主人團服買うてくれ
勝二
かほる
春秋
杉秋
華水
松之助

行幸へ心も旗の色に似る
行幸間近日本人を意識する
刈り入れも濟まて行幸待つ日和
聖駕奉迎生き居し事の徒勞ならず
畏きは赤子へ賜ふ御答禮
奉迎の外に手形の期日が來
日のみこの日焼畏し秋の晴
天守閣をパツクに天皇旗を拜し
奉迎へ小鉢の菊が咲き誇り
(人) サイドカー脱帽さき音で來ち
(地) 奉迎を身にめぐりと巡查立ち
(天) 天皇旗秋一點の雲を見ず

衆題 路

穽ちとはずして柿の皮がむけ
穽今手品のやうにしまはれる
綾なした穽へ落ちぬ男の眼
御馳走が出来た穽をはづすなり
穽まで赤さを逃がすまいとして
洗濯のさがせば穽汽車になり
簀簀子なんか手傳ふ片穽
傳次郎に斬られるだけの繩穽
父はなし母の穽に泣けてくる
おむむけば妻の穽の十文字
お妾の穽をかけてみたりする
鏡臺に滑えては寫る穽がけ
穽解く指に眞冬の葱匂ふ
三日ヶ月に風が吹いてる白穽
芝罘で穽はずした久し振り
臺所がせまい〜と穽がけ
(人) 左手に穽を持つてお出迎へ

雨少
山抱子
秋無草
禿山
無鬼
万よし
町二
葉平
山雨樓
青踏
万よし
琴人
雞牛子
水車
夢裡
變人
少鐘
秋無草
琴人
鬼丸
山雨樓
華水
無鬼
鳥語
町二
同
絲雨
同
里十九

ふるさとへつらく線路は濡れてゐる
 この邊の線路の錆も海が見え
 線路を越えて村の子はたつしや
 玉葱が轉んで朝の線路なり
 妓の涙線路はひかるばかりなり
 座敷から見える線路の霜の朝
 (軸)機關車の火の子線路へ散る曠野
 席廬 弱點 點 五
 二人連こんな處で君に逢ひ
 足弱の雨へ圓タケ強く出る
 弱點は嫁に兩親ないのなり
 弱點の手酌で無事に酔つてゐる
 弱點は俺だけで無い浮世
 弱點を知らしたくないコムバグト
 弱點を阿呆らしいと馴れてゐる
 素月 琴人
 豆 秋 雨 少 踏 同 美 同 二 選 三 郎 閑 子 山 雨 樓 銀 波 えいを 素 月 琴 人
 弱點を知つてる友の眼と出合ひ
 弱點があるとは見えぬ橋子にゐる
 弱點を針でつつく女なり
 孟の底に弱點ある惱み
 落着いて落着いて弱點へまてくる
 弱點はもう打かないと云うた切り
 弱點を握られてゐる坐りやう
 弱點へ耳痛いほごよくしやべり
 弱點を月にすかして幕となり
 指をほきほき弱點をつかれたり
 少々の弱點もあり老けてゐる
 知つてるぞ知つてるぞ五圓借せ
 君と僕弱點だけを理解する
 弱點をこまかす酒に馴れて來る
 同 鳥 語
 鬼 丸 彩 秋 勝 二 山 抱 子 鷄 牛 子 北 人 一 笑 春 秋 角 丸 松 之 助 青 踏 里 十 九 同 鳥 語
 言譯の舌がもつれる弱味なり
 食堂へ來て弱點は背を見せ
 まんまるい月に弱點見られたり
 弱點のそのまゝ通れさうもなし
 弱點があつて電話へ頭下げ
 弱點へ觸れていびつな笑ひ方
 弱點を素知らぬ体の女弟子
 離れてはゐるが弱點握つてる
 弱點を金にかへてる部屋壁
 弱點は自動電話でおごかさ
 弱點をはつきり知つた影法師
 弱點はそれだと肩をほんち打ち
 弱點に雨降る晝を寢てしまひ
 ほろにがき酒弱點を見つめられ
 弱點の眼にも汚れた京人形
 同 耕 之 助 同 變 人 同 秋 同 溪 花 坊 同 八 步 同 秋 無 草 同 點 美 同 點 美

『川柳雜誌』 創刊十周年記念事業の豫告

わが「川柳雜誌」は大正十三年二月創刊號を出して以來最も堅實なる足どりを續けつゝ茲に十星霜、來るべき昭和八年を以て十周年の喜びを迎へることとなりました。わが川柳雜誌社が多年標榜して來た「川柳の社會化、質的向上、量的發展」の實は幸ひ着々として其の成果を收めつゝあります。わが社はこの祝福すべき昭和八年を契機として更に「力強い行進を初めるべく、これが序曲として遂次その記念事業を催すこと」致します。全柳壇、川柳家諸氏の壓倒的御後援を希ひます。

一、記念特輯號

來るべき新年號を以て記念特輯號として、柳壇必讀必携の柳誌たらしむるやうあらゆる努力を傾注してゐます。刮目して御期待をのりします。

三、祝賀川柳大會

新春の佳日を選んで華々しく開催の豫定——例年の本社新年句會と合併——講演に作句に研究發表に劃期的有意義なる川柳大會の出現を期してゐます。日時、場所、其他詳細は新年號に發表致します。

三、記念出版物刊行

A 川柳雜誌第一句集 (題未定) 創刊號より最近迄の「川柳雜誌」から特に藝術味豊かな名句佳句を厳選集録、最も「川柳雜誌」の特色を發揮した句集とする意氣込みであります。

B 柳パイロツト 初心者の指針として、絶好の伴侶として座右必須の参考書たらしむべく、平易にして懇切周到なる記事を掲載すると、致します。

C 路郎雜筆 折に觸れ時に臨んで路郎主幹が語られ或は執筆された、川柳に關する評論雜筆隨感隨想をレヴューしたものです。柳壇第一人者たる路郎主幹の熱血に觸れんとするものゝ見逃すことの出来ない好著、川柳家諸氏の机上を飾る金字塔たる事を保證致します。

▼詳細は追て誌上に發表致します。

兼題 三味線 清記互選

三味線へこから稼ぐ灯がともり 夕鐘
 三味線が埃の儘に子は肥り いわな
 三味線も埃のまゝに世帯染み 水車
 爪彈のわびしや突降りゐるなり 町二
 テンツンへ手の届かない鶴の聲 えいな
 三味線へもの言ふ妓瘦せてゐる 鮎美
 三味線に別から叱言仕込みの娘 松之助
 三味線と階に學生張りよける 小辰
 桃割れが似合ひ三味線よく覺え 掉二
 三味の音へ川の面がゆれてゐる 一久

(二點以下省略)

兼題 雜 詠 清記互選

きてるく顔とてはなし終電車 水車

青空がもう見られない手を握り 南面子
寂光の亡くした友のふるふい 鮎美
橋の長さへ想ひ出つゝくくなり 失名
夕刊の釣銭がつめたき秋の夜 緑雨
切り張りへ赤い夕陽が差してゐる えいな
願へれば幽くものに日和なれ 方眠
兒の書いた妻はお手を開いてる 柴石
星地球が暗れて地上の窓が暗い 町二
ふりむけば風あり落葉する音の ト居
逢ふて泣く女は弱いものでした みつる
以上雜詠の内路郎主幹の選は左の二句)

青空がもう見られない手を握り 南面子
ふりむけば風あり落葉する音の ト居

石川縣 小松町 大火慰問川柳會

十二月廿二日夜 石川縣小松町では三度目の大火で一千二百餘戸焼きつくし我同好者の一路、革刃、水聲、柳三、柳村、富久雄、青嵐、大魚、松雪堂、東風、しとし、千華、柳鴉、柳々子、玉水、丸一、雅柳、美松、袋美萬九坊の諸氏が類焼されましたので、慰問の意を表すため、一夜作句して當日の會費は費用を差引き殘金で、誠に輕少なから慰問品をお送り致しました。

路郎先生、綠雨、里十九、松之助、春光、鵜峰、十起、麗光、角丸、夕鐘、明暗子、豆秋、かほる、鮎美、閑子、琴人、汲食子、雅幽、水車、夢裡、ひるし、山月、白峰、小柳子、

黙平、おさむ、嬖人、禿山、勝二、卯三、銀波、多津子、えいを、新水、友帆、女形、石皮、鬼、紫石、あや美、掉二、白柳子、山雨樓、萬よし

外左の方は本社の主催に賛成されて會費と兼題の句を送られました。京和から）福造、木公、欸乃、以下大阪）八步、靜太、日本村、一笑、紅、梨花、町二、（島根）縁之助（縁雨記）

席題 忘れもの 五

疑がうて見たい主人の忘れもの
忘れものらしく電車に一人ある
此頃の俺を疑ふ忘れ物
みな言はぬ先きに手渡す忘れもの
聴診器忘れて醫者はなんとする
忘れもの貴方が提げて居たつもり
忘れものぢいむさきにつまみ上げ
忘れものした其のわけを尋ねられ
人の膝見て思ひ出す 忘れもの

内職も手傳ふてゐる合住居
手拭も一寸借られる合住居
合住居お箸が足らぬにきやかさ
合住居ごつちも酔うて歸つて來
合住居末の子供の好ききらい
合住居水屋はうごくこにあり
合住居割木の置場ゆづり合ひ
合住居竿一本を譲り合ひ
二階から千切のおすそわけ
年は未だ知らない儘の合住居
二階から掃除しかける合住居

白峯 閑片 勝二 黙平 没食子 松之助 變人 同人 水車 同帆 友帆 かほる 鬼丸 貼美 卯三 鶴峰 里十九 明暗子 新水

合住居米がごつちらもきれてゐる
合住居二階の掃除氣にいらす
化粧半ば下から留守を頼まれる
路郎 紫石 勝二

「小松大次五和アパー、陸より本折町方面を望む」



合住居酔ふてる聲で閉めてゐる
合住居カンテキがまだあいてゐず
水道の鍵を握つて合住居
（佳）合住居昔を語る盾のあと
黙平 緑起

（同）滞つてゐるを二階にがんづ
（同）人情と云ふものを知る合住居
（軸）合住居床の間のない方へ住み
（同）氣の合ふた同志一軒で住み
平選 同 琴人 禿平

席題 丹前

圓タクをれぎる丹前酔ふてゐる
丹前が生きてる草魚を買つて來る
丹前の我家を狭いものにする
丹前の膝へ仔猫の日の永さ
丹前はふとんの柄でよいのなり
丹前になれば酒よし三味もよし
丹前で油ぎつてゐる 旦那なり
丹前になつた旦那のくだけよう
丹前は煙管の先で使ふなり
（佳）丹前の下から呼ぶは犬がある
（同）丹前と替へ大阪の酒をほめ
（同）丹前のおぐらへ金の少なすぎ
（軸）遊廓を聞く丹前の憚からず
兼題 類 燒 路 郎選

箏笛なご出して類焼してみる
佛壇の外は類焼してし舞ひ
類焼は母の背中であらう覺え
風向きの事を類焼くり返し
類焼を慰め冷やで酌いでくれ
類焼は垣根が燃えただけのこと
二回目の號外に未だ燃えてゐる
類焼の鐘もさびしい雨にぬれ
バラツクに焼けた火で保険掛てゐず
類焼はちよつと大きな顔で立ち
緑雨 山雨樓 松之助 かほる おさむ 豆秋 貼美 友帆 雅幽 勝二

川柳 加茂川句會 (京都)

十一月十日 平岩司郎報

句會が多すぎると云ふ中で三十六名の熱ある作家連が出席され事が、何よりの喜びです松丘町二兄が本社句會でさへ話さぬのに初めて京に來てのお話が深く印象に残された。舜二兄木公兄が「手傳つてやらうか」と言つて下さつたのや波樓君が同校のよしみで働いて下さつたのは喜びに堪えない。

兼題 金 槌 町 二選

金槌の打目、光つて大工老ひ
金槌を待つしめ繩はくたびれる
門標をうつ金槌の大きすぎ
釘を打つ金槌で手を叩いてる
向ふ槌ギヤシグの型に眼が据り
金槌に反抗するか曲る釘
金槌で蟻を叩く資本家よ
金槌もさびて、父の一週期
金槌の父へ男の子等がより
金槌を渡しほこりを逃げるなり
金槌へ女が細い指の節
秋空へ金槌冷めたりひくくなり
動かぬ様に一人は釘を持つて
金槌の音も愉快に僕の家
素人の持つ金槌は首が抜け
金槌をかんな屑から探し出し
床板を張る金槌に釘をさる
金槌の代りに石を探しあて
玩具箱底に金槌隠れて居

麗光 秋乃
新水 悟久
木公 泥平
葉公 晴人
變人 草史
秋生 冠生
同 櫻月
同 晃洲
同 富美三

金槌の音も生活するひらき
ハンマーに汗夕暗の風の街
思案して立つ金槌に宵が足らず
(人)親が來てまた金槌に用がぬれ
(同)兼請場に金槌一つ雨にぬれ
(同)金槌の音背景は捲れている
(地)金槌と釘の間を黄昏れる
(同)メナムハンマー大地の音
(天)金槌を冷たく親の棺へ立ち
(軸)新妻にどの釘もみな曲るなり

席題 心境雜詠 葉

幼は華麗に眼る街を行く
思ふことすべてのまゝの夜の膳
皆無事な寢息不思議に眼がさへて
秋さびしからず木の實うれしも
(人)わくら葉と黙つ秋の陽を浴び
(地)心境の變化を語る眼に落葉
(天)木の葉ひそかに寝返り池の底
(軸)南天の實バラへ散れ別日

同山
同造
清月
乃の字
清月
葉平
秋乃
町二
平選
ゆき
草史
變人
秋乃
進示朗
乃の字
葉平
人選

咳を氣にして立上る神經
咳をした父を起きてるなどと思ひ
咳一つ軽い話が途切れたり
咳で病むその日コスモス散りゆき
薬向へ通ふ廊下の軽い咳
咳二つ三つほり出した銀煙管
冬の風奥もはなれも咳がする
聞かれては悪い話へ咳をして
咳きこんで涙出る
咳一つ講演をする聲となり
親の咳子の咳暮が迫つて來

咳一つ色街の朝ぬける人
咳をしながら言ひ付ける事があり
咳一つ欠伸一つにくせを持ち
咳一ついづれも自働電話が咳となり
早起のいつもの咳が聞こえて來
出前持咳をしながらかしい日
(住)娘の咳が氣に母の手は荒れて
(同)咳一つ朝の空氣をうかせる
(人)咳一つして淋さをまぎらはし
(地)咳入れし父の怒りの枕元
(天)咳入れし見舞の花が一つ散り
(軸)咳一つせすに現金數へたり

席題 吃驚

すきを見て驚かすらしい子の構へ
珍客へしばし吃驚つつけられ
驚愕へ鼠助かつた顔でいる
吃驚をした振りをして抱き上げる
吃驚をさせば向うは知つて居た
金持つてゐて吃驚もしてくる
母なればこそ吃驚もされて
とんで來たボール硝子へハツと
二人を吃驚させた風の音
吃驚をさせられてゐる美しさ
大仰に吃驚をした瞳の涼し
驚きへ母は何んにも云へず居る
電報へ齒の根の合わせ寝間着で
女給もした吃驚せよと一つ達ぎ
吃驚をした電報は讀み違ひ
吃驚をさせたつもりで子は笑ひ
鶴を吃驚させて水を捨て
御近所の吃驚させて小穴ですみ

秋生 豐次
福造 秋乃
新水 同山
同造 清月
清月 乃の字
波樓 葉平
波樓 秋乃
町二 平選
清月 ゆき
清月 草史
同山 變人
同造 秋乃
新水 進示朗
同山 乃の字
同造 葉平
同山 人選

新 水選

前途尙嬉しき満ちる猪口となり
 父親の前途と異ふ本を讀み
 瀧の音聞いて前途を思ふ朝
 まよあすの陽がてらむ
 前途ある身をしみじみと意見され
 立志傳ふせて前途の伸をす
 前途をば祝福されたドラが鳴る
 前途ある子に手術藝冷たすぎ
 神様に前途は闇と申し上げ
 兩親にすまず前途を病み續け
 吾が前途わが愚かきさみつめたり
 幸福な前途の山が時雨であ
 行末のことが寂しく灯を消せり
 前途等捨て、刹那に生きて行き
 唇を噤んで前途にある希望
 終列車前途が見えたやうに乗り
 (住)妻の眼に前途明る朝の膳
 (同)酔はざれば暗い前途が續く
 (同)親友の前途へ酒をつぎこぼし
 席題 踊る 京

水選 福造 二山 秋生 葉平 乃の字 草史 富美三 麗光 弘一 乃の字 泥鈴 清月 町二 悟久 迷兆 木公 紫明 清堂 櫻月 耶選 波樓 豐次 晃堂 變人 紫明 葉平 迷兆 乃の字

ウキンドの飛沫が踊る雨宿り
 踊つて姿母親泣いて
 ソファへ踊り疲れた靴をぬぎ
 クツシヨンに踊る心のハネ返り
 取持つておいて女將は踊るなり
 雨の宵秋の踊りへさそはれる
 (佳)朝らかに踊るカクソに借用書
 (同)特急の車掌は踊る様に
 (同)茶柱の中に爲替は踊るなり
 (同)掌へ踊らしている焼いた栗
 兼題 標 準 司
 標準を一圓とした贈り物
 標準をつけても米の値に勝はず
 壯丁の標準より俺は肥へ
 標準をうちぬゑにして母は
 標準に充たぬ憂へ紙幣の東
 鮮人の子も標準の中にあり
 標準を自作に菊の會をほめ
 親しめぬ人と語らう標準語
 生活の標準を語る服装でか
 標準の体温今朝の朝からかさ
 標準の文具貴族の子もつかひ
 海並れて水平線がわからない
 チップの標準を聞き新婦旅行出
 標準がよつばご違ふ彼と居る
 標準を換へる努力へ曲る口
 (住)標準がとれず神経尖つて来
 (同)榮養の良き標準を越へて
 (人)標準時間でおいて早すぎる
 (地)標準を自分でくれば若かりし
 (天)生活の標準にする主婦の友
 (軸)打ちとけぬ兒になりし標準語

木公 草史 秋生 二山 新水 麗光 清月 富美三 二山 耶選 乃の字 奇可愛 泥久 悟久 見洲 麗光 歎乃 葉平 啓秀 弘一 悲虎 舜岐 木公 新水 乃の字 晴朗 富美三 司耶

川柳光耀會 (大阪)

十一月六日於キンガ喫茶室竹内機見女報
 少人数乍ら喫茶室は満員の盛況で雨の音を
 聞き乍ら作句致しました。披露後霞乃女史
 のお話あり前途はるけき光耀抄を各自の熱
 と意氣でよりよきものにすべく誓ひました。
 出席者路郎先生、霞乃女史、梨花、貴志子、
 道子、機見女。

席題 油 藪 乃選 梨花
 油つけて赤毛を今日はみがき
 晝見れば浪速情緒も油浮く
 くからの油をほこる濡羽色
 をぐらやの油を母に頼まれる
 超然と油をとかすキハツ油
 方言に主ものぞく油賣
 優勝へ思はず握る油汗
 (軸)灯に入らば油もの灯とり出
 (同)モダンガール油の父を持ち
 席題 額 藪 乃選 貴志子
 額釣りに暫らと和ごむ新世帯
 世に媚びぬ畫の額縁はめずあり
 額縁を買はればならぬ畫の出来て
 席題 封 筒 乃選 梨花
 住所をきけば封筒を母が出し
 母の愚痴綿々として不足税
 逆封の意氣で書いてる戀敵
 封筒は茶色の地味なラブレター
 字熊まで似てきたこと茶封筒
 見残した夢抽斗の繪封筒
 青春はピンクの無地の繪封筒
 同 道子 機見女

(地)共通の理論へ幹事静かなり
(天)物理から共通性を解いて居る
(軸)悪まれぬ共通点があるばかり

席題 本 當 華

本當を語すに膝が近ふなり
本當が言へず襖に泣きあかし
本當の事は悲しい心持
本當に聞いて母親詫びに行き
本當に洋行をした友を賞め
目も口も本當だつた夢を見る
ゴシップを本當にして茶をすゝり
平常着の女本當の聲を出し
本當をいへば女は笑ふ丈し
本當にしてゐた母へ氣がとがめ
姉だけに打明ける氣の足袋をぬぎ
(人)本當な二人になつて抱く火鉢
(地)本當へ自働電話を掛けに行き
(天)本當に水を信じる 父の墓

席題 素 足 嶺

吉左右 同 新 水 吉 左 右
水 選 水 水 水 水
主 税 主 税 主 税 主 税
幸 捐 幸 捐 幸 捐 幸 捐
竹 木 竹 木 竹 木 竹 木
卯 生 卯 生 卯 生 卯 生
か ほ る 同 桃 水
卯 生 卯 生 卯 生 卯 生
月 選 月 選 月 選 月 選

繁 堂 南 耕 幸 捐

都々逸の文句へ膝をつきつける
唄はうと思ふ都々逸唄はれる
都々逸を唄ふてからをもてくる
都々逸がなんぼでも出る人と飲み
それからそれと都々逸三味に合ひ
都々逸に嬉しうなつた一人なり

席題 賣 出 し

賣出しへ近所は隙を見て出掛け
下駄で来た母へ賣出し暗れてくる
賣出しの聲になつてる赤だすき
賣出しへ娘の袂長くがすき
賣出しへつき合はれて風邪を引き
賣出しへれんれん二人あつかまし
賣出しへ羽織の紐がひつかゝり
賣出しへ友が来て立つ懐手
賣出しの街で子供の足を踏み
賣出しにござせ賣れない店構へ

川柳 鶴 町 句 會 (大阪)

十月十四日夜

隣から鬮が臭ふ鼻をかみ
鼻が突がつて嘘言へぬ性分
お化粧をして大切な鼻になり
口實のかわりに鼻をかんで居る
(佳)團子鼻金庫の鍵が腰にあり

宮岡白峯報

本箱の前で麻雀雀が更ける
本箱を飾つて夫婦若いなり
本箱へ手をふれて見る病上り
席題 パケツ 小柳子選

桃 水 嶺 月 人 氷 生 秋 選

紅 鐘 選 紅 鐘 選 紅 鐘 選 紅 鐘 選
紅 鐘 選 紅 鐘 選 紅 鐘 選 紅 鐘 選
紅 鐘 選 紅 鐘 選 紅 鐘 選 紅 鐘 選
紅 鐘 選 紅 鐘 選 紅 鐘 選 紅 鐘 選

古パケツ歪んだ儘の二階借
御亭主がひいてパケツが當りけり
若夫婦パケツへ笑ふ事が出来
パケツ提げた姿も冬になり

席題 五 分 別

しよんぼりと五分別畫の街に立ち
五分別の兄は親爺と氣が揃ひ
五分別にしまだ間に合ひ息子な
五分別に成つても白髪かくされず
(人)五分別に成つて女に嗤はれる
(地)五分別にして判決をきいて
(天)五分別にして孝行をしてる

川柳 御 旅 句 會 (大阪)

十月三十日夜

割引を牛額ならの慾があり
妻の泣き割引して聞いて置き
朝霧の中に割引ぶら下り

紅 鐘 選 紅 鐘 選 紅 鐘 選 紅 鐘 選

紅 鐘 選 紅 鐘 選 紅 鐘 選 紅 鐘 選
紅 鐘 選 紅 鐘 選 紅 鐘 選 紅 鐘 選
紅 鐘 選 紅 鐘 選 紅 鐘 選 紅 鐘 選
紅 鐘 選 紅 鐘 選 紅 鐘 選 紅 鐘 選

投影が衝突して居る白い壁
代表は正面衝突して戻し
衝突を遠く漁夫の利を占むる
衝突の現場自動車弱はすぎる
衝突は互に口で云つただけ
衝突の見舞へ居つた事があり
(注)衝突の怪俄に社倉を過つて見る
(同)衝める氣で上役の髯に突か
(軸)病床で自動車の損害も聞き

席題 身邊近況 葉

行事があつても俺は無位無冠
三十は三十の戀をしたくなり
近況を一年振りて母に書き
惣れてゐる弱身を女知つて
(人)灯に行けば灯による我哀し
(地)生きてゐるだけ友と呑むる
(天)皆が皆うち向く日の窓の陽よ

席題 抱負 艸

あれこれ抱負のまゝに死んだ母
此の抱負あつて今日生きて居り
ちと世間見よ抱負を笑はれる
戀人が出来て抱負は立消えれる
抱負が大きくも負は住み
抱負なごあつた昔をなつかし
せめても此の企圖を生み出
(軸)抱負なご早い新開辭合なり

席題 觀兵式 司

觀兵式ラヂオ聞かへ聞くなる
觀兵式砲撃だけは確かと聞き
觀兵式馬にもめぐる今日の榮へ
觀兵式見せて歸りは泣かぬ子だ

紀太 水車 艸樂 禿山 銀波 紫石 琴人 翠夢 平選 艸樂 紀太 銀波 翠夢 水車 琴人 司郎 樂選 銀波 禿山 文蝶 翠夢 半醉 紫石 艸樂 禿山 紀太 文蝶 多郎

拜觀に初めて知つた武器もあり
(佳)美しく觀兵式を見て戻り
(同)觀兵式三萬坪を埋めつくし

銀波 水車 人選

品切れの陳列棚へ陽があたり
品切れを丸善で聞きあきらめる
品切れへ女房は強いきを言ひ
品切れへ子は聞強いきを言ひ
品切れのバツトに四五軒廻らされ
品切れを楯に値上げを考へる
品切れになつて値上りのことを聞き
凡詩人悲し言葉の品切れ
品切は藏まで行つた聲になり
品切れでふと儉約の氣を起し
品切れになりそうも香具は出し
(軸)初めから無も品切ですと言ひ

多郎 紀太 正夫 司郎 同醉 半醉 同醉 琴人

先妻の髭も小さくなつてゐる
先妻の浴衣行李の底に冷え
幸福のままで先妻死んで行き
先妻を尋れて驛の小さすぎ
先妻が案内な金残しとき
先妻へよつぽ惣れてやめめなり
死靈でも出るに先妻浮かばれず
先妻に執着の出る煩づえよ
(人)アルバムに先妻若ふ残つて
(地)先妻へすまない妓家に入れ
(天)先妻の件宜しくつけ加へ
(軸)先妻は少しだらけた坐りやう
(同)先妻へすしを渡して酔ひ仆れ

路 路 路 路 路 路 路 路

兼題 寒さ

路 路 路 路 路 路 路 路

朝の陽に寒き見つけて寝てしま
洋館の寒さに別な守衛室
もの干に寒く暮れてる濡れたもの
寒からん兒よ、より添へよ、着よ
形容でなく耳鼻の飛ぶ寒さ
(人)お、寒おキツカケして女給密
(地)寒まなご言ひは居れぬわはり
(天)寒まなご言ひは居れぬわはり
(軸)寒まなご云へばイ、ヤと膳を待ち
川柳 天王寺句會 (大阪)
雑誌社
十一月十二日於内藤製作所須崎豆秋報
陸下行幸在まします 河内平野に銃火閃め
く晩秋の一宵を大演習氣分に浸りながら謹
ましく詩作に耽りました
夜 景 景 景 景 景 景 景 景
ラフシーンの夜景は月をほめて居り
川をへだて、宗右衛門町に灯が動き
星二つ泣てるやうな橋に出し
小門だけ開けて勤行の鐘の音
明滅の夜景を背にベンチにお
對岸の夜景守衛と話すなり
ホテル今夜景の見へる窓を開け
(客)夜景だけ見せて友送送つて來
(同)辻占の提灯がゆく薄のはた
(同)瓦斯燈へ遠吠へを聞く寒い風
同 夜の景色二人の影があるば
(人)ふる夜の夜景も赤き灯のふえ
(地)夜景フト飲む氣になつて辻を折
(天)窓近く夜景に濡れた女の瞳
紀太 琴人 葉平 禿山 紫石 水車 路郎 柳村 豆秋 柳民 葉光 機見女 鮎美 同車 豆秋 柳村 柳民 夕鐘 機見女 南面子 三郎

川柳 雜誌社 加古川句報

兵庫縣)

水田光穂報

招待

招待へ行くに氣兼ねな暮しにて 美也光
満員へ招待席は空いて居り 同
特別の招待物狀に口紅の痕 光穂
招待で初めて知つた別天地 泰山
招待に汽車賃自辨と書いてあり 同

新參

新參の給仕用事が欲しいなり 光穂
突拍子な返事を新參笑はれる 同
新參の小僧氣轉を利かせすぎ 美也光
新參ははちかれた様立ち上り 泰山
新參は移民の様な顔で来る 同

満洲

満洲が嫌なら俺と別れるか 泰山
満洲で少なき吾をふり返り 光穂
生き甲斐を満洲の野に求めんか 美也光
満洲を祖上に聯盟あぐんでゐる 同

友情

友情は海山越えて届いて來 泰山
友情がたゞつてのこの苦勞 同
友情の厚さに負けた支配人 美也光
友情を盡した後は淋しくて 同
左遷するする友へ眼鏡が曇つて來 光穂

川柳

西條句會 (愛媛縣)

十月二十日伊豫鐵西條支店樓上に於渡淨曉
童、在問小樓の兩氏を迎えて句作精進する
荒井英賀夫報

兼題 日本晴

日本晴今日安心の舵を取り 霞
遠足の子も朗らかな日本晴 同
日本晴太平洋の波光り 同
日本晴バラソルの色頗に映え 同
菊の香も高く旗日の日本晴 同
稻の穂に微笑んでゐる日本晴 同
合格の通知へ今日の日本晴 同
(人)業召裡で校門を出る日本晴 同
(地)お召裡が今にも通る日本晴 同
(天)秋祭惠まれてゐる日本晴 同

兼題 酒

呑むまいと誓つてはゐるあくる朝 曉
酒癖が悪いて町の人氣者 同
酒癖があつて二次會はつとかれ 同
酒癖でないといふ今夜も管を巻き 同
あの男にある酒癖はチトひびき 同
たしなめてゐる母も酒癖真似てゐる 同
酒癖がもう出る時分目がすわり 同
(人)酒癖があつて縁談ふいに成り 同
(地)酒癖を軽く換るワエトレス 同
(天)呑まなば良い妻もあり職も 同

兼題 思ひ出

思ひ出の今日思ひ出の地に遊び 英賀夫
思ひ出の丘に二人は立つくし 同
思ひ出の街の灯淋し秋の暮 同
思ひ出の日はゴーストツツ 同
子守唄ふと亡き母を思ひ出し 同
アルバムをくれば思ひ出湧き來る 同
(天)思ひ出を語る義足の興奮し 同

漢選

西英子 虹一
由居可 曉童
英賀夫 線晴朗
英賀夫 線晴朗

(同)思ひ出をたぐれば君は...

(同)思ひ出をたぐれば君は鳴り莫^ら 以來
(人)思ひ出へ唯ホンヤリと微笑し
(地)思ひ出を語す二人にある白髪
(天)思ひ出の港、港に灯がともり
席題 スリツバ 矢
スリツバの左と左に臆やまされ
階段でふとスリツバを踏はずし
急患へスリツバ廊下で脱げかゝり
消毒薬スリツバにまで染みてゐる
故郷の父スリツバが履にくし
スリツバを並べて女中かしくこまり
(人)スリツバを向けて患者を待たせ
(地)スリツバに赤い印の女店員
(天)スリツバへ油が落ちた髪結師

由多可

由多可 孤鶴
矢舟 小樓
線晴朗 舟選
曉童 舟選
虹一 舟選
英賀夫 舟選
由多可 舟選
小樓 舟選
線晴朗 舟選
英賀夫 舟選
由多可 舟選

講堂に黃菊白菊明治節

咲き誇る菊へバラツク建て並べ 虹
車屋が菊の秘傳を知つてゐる 同
(人)妹の腕は菊花摘んだだけ 同
(地)白菊のボタリと落ちた背でした 同
(天)退院の今日白菊を届けられ 同
席題 缺 席 小
缺席を止めるな俺の生活苦
缺席はたしか意見が合はぬから
缺席の理由()とも云へず
缺席の理由にせんと頭痛膏
缺席の電話風邪で物足らず
缺席へ書類が廻る重大事
(人)缺席の數と雪とを見比べる

英賀夫

英賀夫 孤鶴
英賀夫 孤鶴

由多可 樓選
線晴朗 樓選

(地) 缺席へ折だけ届く祝賀會
(天) 缺席へ氣を揉んでゐる女教員
席題 名 物 孤 鶴選
名物の方へとび付く旅歸り 虹選
名物があつて其の地の名が通り 西英子
一寸行く用へ名物のなまれる 虹一
觀光團名物買ふに氣が付かす 曉童
(秀) 名物で隣の旅行先が知れ 英賀大
(同) 名物を賣りか物てより三代目 矢舟
(同) 賣聲のよい名物が先へ賣れ 霞溪
席題 愛 嬌 互 選

愛嬌もなくして淋しい父の顔 小樓
誰にでもまく愛嬌と知らずして 英賀大
普一坊八步對座吟
十月二十八日 於山代溫泉玉屋 大西八步報

課題 空、秋
晴れ渡る空へと希望伸びて行き 普一坊
鐵腕が鳴る〜秋の空が澄む 同
秋風に失業らしいふところ手 同
嬉しさも悲しさもある故郷の空 八步
一風に秋の芒となりけり 同
偏屈の心にふれた秋の風 同

夕鐘鮎美對座吟 (大阪)
十月二十二日夜 水谷鮎美報
戀ごゝる指のさきまで艶々し 夕鐘
艶麗の踊る袖にもこぼるゝよ 鮎美
見ぬふりの妓の艶麗を求めたり 同

魂を風船玉にうばはれて 夕鐘
ろうそくの灯に魂の見へてゐる 鮎美
魂を忘れた男に夜があける 同

矢車莊川柳會 (松江)
十月十七日夜 於矢車莊 久方暮秋報
コスモスの花がひよる高く 咲く庭を圍んで
句作に耽る當夜の成績は採點の結果、暮秋十
三點、卷二十二點、都之介、硯滴十點、眞吉一
點で月々之を統計にとり更に躍進する事に
した。

兼題 噫 呼 互 選
あゝ！哀戀の僕に秋が来て 居る 都之介
あゝ、慘めですれえ聲が手にさばる 卷二
階級闘争は尖鋭化す噫呼！日本 暮秋
噫呼！人生は鐵の鎖りを何時ほごく 硯滴
席題 進軍、夕焼け 五分間吟
進軍のラツパへ馬も勇み立ち 眞吉
夕焼けのカーテン涙する人よ 卷二
夕焼ける明日は天氣だ草刈りだ 硯滴
夕焼ける 杜の鳥の凶感ぞ 都之介
稻を刈るもう夕焼けへ氣が疲れ 暮秋
席題 興廢の前夜 都之介選
建國の朝だ流血の嵐は止んだ 硯滴
興廢の前夜 祖國に吹く風 暮秋
SOS 興廢の前夜と知らざりき 卷二
席題 金波銀波 硯滴選
豊漁の帆船金波銀波のなごやかに 暮秋
(佳) 金波に銀波に僕の憂鬱が解け 都之介
(同) 金波銀波更けるにまかす港町 卷二
席題 惜み知りそめし頃 港二選

十六の心へ寂し秋は去る 硯滴
惜み知りそめし頃かな君知るや 暮秋
(佳) 耳朶の赤さも處女の歧路に立 都之介
(同) 惜み知る頃に氣兼ねか朧月 暮秋
席題 大和民族 暮 秋選
東半球日の丸燦と輝やけり 卷二
(佳) 颯風颯風だ地球上の大和民族 同
(同) 鐵拳腕で我も大和に生れ來し 都之介

明珠居偶會 (神戸)
十月二十一日 西村明珠報
牛乳へ頭を重たそうに上げ 秋彦
手枕に晦日の事を考へる 同
煩悶がつつく枕を裏返へし 同
言譯が立たず牛乳のまされる 明珠
三等車空気が落つかず 同
寢不足の目でかへに行く水枕 同
初秋の牛乳へ冷たい陶器皿 春秋

明珠居偶會 (神戸)
十月三十日 西村明珠報
金のいらぬ相談ならなんぼでも 寄舟
すみつこにあて相談に同意する 明珠
相談へだんぐ、弱い父であり 春秋
相談へ母親云ひたさうにする 同
話未だつかず鐵瓶音をたて 秋彦
相談をすればこそ、妻は言ふ 同
相談はやつぱり首をさくる話 耕人
相談に無口な友がついてくる 同

相 談 互 選
寄舟
明珠
春秋
同
秋彦
同
耕人

硝子切素人が使ふ面白さ

硝子越し子が酔の腹撫でてゐる
子の不平硝子に何か書いてゐる
天窓の硝子を踏んで猫通り

東 髪

一錢のお客また来る東髪
色々の東髪に逢ふ朝のマス
東髪理想を捨てた姿なり
東髪にしてからいつそ愛される
東髪が似合ひ娘も働らく氣

つ ど ひ (大阪)

吉田水車報

清元を炬燵にもにれ聞きゐたり
雪とけの音も氣にする片思ひ
値切るのへ音を聞かせる茶碗店
遠吠を聞いて夜業の茶をすゝり

水穂居偶會 (松江)

神田水穂報

十一月八日夜
當夜は松江大火以來の火車で大變驚かされ
ました、問もなく鎮火後、天痴人、柳人、
巷二、諸氏と共に句を作りました。家事の都
合で暮秋氏の出席を得ず甚だ寂しかったです。

席題 火車工場、淡い戀 互 選

燒跡をじつと見つめて居る家主 水穂
半鐘へ病床の子の熱高し 同
工場も女工笑ふて晝となり 同
火車場の非常警戒へ寒くなり 柳人
人間は疲れ工場に燈がともる 同
口笛へ誰を待つ夜の淡い戀 同

夕焼へ水車は廻る淡き戀 同
工場服の破れ目から覗く不平なり 天痴人
工場の朝よ煙突うれしいぞ 同
非常線消防服へ避けるなり 同
菅の穂の風とゆれてる戀心 同
燒跡の煙りの中にシヤベル持ち 巷二
見學の眼に工場に廣さなり 同
新開地にも工場になる敷地 同
淡い戀五燭の光り頼りなく 同
深い戀終電車にある物思ひ 同

三人寄りて (大阪)

十月六日夜 於里十九居 水谷鮎美報

俠 類 杏 三選

俠氣へすがつて見たい氣にもなり 里十九
俠氣がもつともわるい辭があり 同
俠氣へれつから鐘が鳴らぬなり 鮎美
俠氣のはでな死にようしてしまひ 同
俠氣のうなづいてゐるばかりなり 同

美 聲 鮎 美選

美聲にもう一本をあげてゐる 里十九
美しい聲ほがらかなビクニツク 同
案外な美聲にたじろく電話口 杏三
(軸戀人の美聲へうつつなる世界 鮎美
(同) 獨吟の美聲へ銀の雨が降り 同

眼 鏡 杏 三選

變装の一つに黒い眼鏡あり 里十九
形見分け眼鏡は別に添へてある 同
親且那眼鏡を横へおいたまゝ 同
博士のめがね冬にくもりぬ 鮎美
日向ぼこめがねに嘘はなかりけり 同
貧しさの眼をわかけてなほざびし 同

川柳 梅田觀劇句會 (その三)

十月二十三日 於大阪歌舞伎座

水谷鮎美報

題 濱松屋

もう化粧ちやゐられれえよと肌を
力丸の科白になつてちからいり 里十九
振袖の長さに困る菊之助 同
南郷はしびれのきれた顔になり 同
にの腕のさくらの影りもの凄うさ 鮎美
辨天の鬚をくづした捨科白 同

題 新口村

花道の長きに困る孫右衛門 里十九
萬歳が小そう見へる高島家 同
新口の雪はちよほへも降りかゝり 夕鐘
梅忠が二重舞臺で孫右衛門 鮎美
道行の二人をおがむ孫右衛門 同
忠兵衛の涙が雪にひかるなり 同

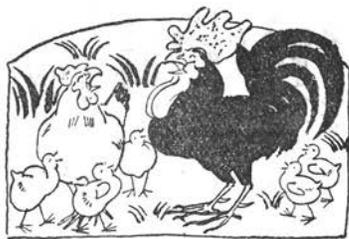
題 新歌舞伎座雜觀

喰べるだけ喰べよと歌舞伎座ふ髭 里十九
坂町のエロも見へてるバルコニー 夕鐘
歌舞伎座のものたるもの上繪看板 同
一幕を見る歌舞伎座の宵の人 鮎美

天王寺句報

須崎豆秋報

題 (火(灯)) 紙上互選
酔つてゐるのかちと火が? 卷煙草 葉光
賑やかに焚火に明けた夜警團 孝男
二階借り火種を下へもらひに來 詩郎
灯の入つた村なつかしく浮ぶくる 柳民



樓雨山 窓の輯編

▼柳壇にとつて特に多事であつた本年も押迫つて本號を以て無事昭和七年を送ることになつた▼本誌は来るべき一九三三年を以て創刊十周年を迎えることになつた。

路郎先生、綠雨兄の献身的努力を始め同人社友の強き熱愛が茲に見事な結晶を築き上げたことは勿論だが、常に絶えざる御後援と御愛護を與えて下さつた寄稿家諸賢愛讀者諸兄の御厚意を心から感謝する次第である。

▲本誌新年號は創刊十周年記念特輯號として出すことゝなつた

柳壇へ誇るに足るべき大衆版をお目にかけてたいものだと思つた。幹を始め編輯局一同腕に燃りをかけて準備を進めてゐる。

▲昨年四月號から本誌へ連載された長野吉高氏の「柳の絮」は非常な好評裡に本號を以て完結を告ぐるに至つた。劇中の劇は貞子さんの「戯曲出版記念會」を以て結ばれてゐるが、いづれこの「柳の絮」も單行本として出版されることであらう。永らく御寄稿を頂いた長野氏並に愛讀者兄に厚く感謝する。

▲本號原稿幅帳のため牛文錢氏の「千日前今昔史」は遺憾乍ら本號に續載することが出来なかつた。

▼安川久流美氏の「かたい鉛筆」十二月號にうつつつけのユーモラス篇だ。

▼十一月四日の關西日報「讀書界」に鄭重なる本誌紹介の筆を執られたのは、同新聞社主筆の高梨光司氏、御厚意を深謝する同紙は歌、俳、柳壇舌文藝に對する必讀の文章が尠くない。柳友の愛讀をお勧めする。

▼十一月四日夜の本社十一月例會では特に路郎先生から、句會プリントの雜吟互選高點句に付て大變有益なお話があつた。このプリントの仕事も次第に有意義なものになりつゝあることを喜んでゐる。當夜杏三君は兼題「姿」の選をすることになつたのであるが、お子達の急病で缺席された。

尙當夜席上琴人君の御努力による句會プリント「菊の雫」が配布された。

▼蛭子省二氏の贈入りで梅本塵山翁（本誌に武玉川初篇研究を執筆下さつてゐる秋農屋翁の事）から風俗史雜話「肱枕草紙」の御寄稿を頂いた。これは新年號のお楽しみとして豫台しておく▼今回左記の方々が本社賛助員客員たることを夫々御快諾下さいました。

費助員

阪大總長 長岡半太郎氏
理學博士 小見 笠原路生氏
阪大小兒科 齋藤博士

明色美顏 長野 濱漬氏
白粉本舖 廣告部長

戲家 長野 吉高氏
研究家 谷脇 素文氏
畫家 伊藤 愚陀君 (大阪)
上野 錦水君 (小松町)
吉田 水車君 (大阪)
廣江天痴人君 (松江)

▼今回左の四君が本誌共選々者に推薦された。

伊藤 愚陀君 (大阪)
上野 錦水君 (小松町)
吉田 水車君 (大阪)
廣江天痴人君 (松江)

▼同人太田朝陽君は今回郷里(九州)へ歸國悠々自適徐るに後途を窺されることになつたので十月二十七日そば降る雨の夜南地大市で同君を圍んで惜別の宴を催した。出席者は路郎主幹、綠雨、琴人、萬よし、艸樂、新水、悟郎、一杉、貴山、山雨樓の十一名、十二時過ぎまで飲み且つ語つて名残りを惜んだ。

▼十一月二十二日午後六時から大阪朝日會館で關西學院の文科祭が催された。愚陀君が委員として活躍してゐるので路郎先生は招待の席に參列されたさうである。

▼本號の校正は町二、杏三、綠雨、鶴峰の諸君。

投稿規定

- ▼投句は總て葉書又は同型の厚紙に各種各題必ず別紙に認め、住所氏名雅號を明記する事。
- ▼「近作柳櫻」は全家の雜吟を募る
- ▼「川柳塔」への投句は同人及び社友に限る。
- ▼光耀抄は女性作家に限る。
- ▼各地會報は半紙判の原稿紙に清配の事。
- ▼文章は二十字詰半紙判原稿紙に認める事。
- ▼書體はなるべく楷書「川柳雜誌原稿」ご封筒に朱記する
- ▼締切は嚴守されたし。
- ▼投稿其他につき御問合はすべて返信料封入の事。

募 集

第十卷第一號課題

十二月五日締切

(各題十句以内)

- ▼影 前田雀郎選
- ▼姿 住田亂歌選
- ▼半額 尼 綠之助選

第十卷第三號課題

一月五日締切

(各題十句以内)

- ▼責任 橋本綠雨選
- ▼街頭 松丘町二選
- ▼玩具 伊藤愚陀共選
- ▼上野錦水共選

每號募集

- ▼近作柳櫻(雜吟) 麻生路郎選
- ▼光耀抄(雜抄) 麻生葦乃選
- ▼各地柳壇(會報)
- ▼文章(評論研究感想吟行漫文)

社 告

社務一切(編輯に關する件、投句、贈讀廣告)の用件は下記川柳雜誌社事務所宛に願ひます。

價 定

一部 金拾拾錢
 牛箇年前金(特輯號共)壹圓八拾錢
 壹箇年前金(特輯號共)參圓六拾錢
 (牛ヶ年分は上御資金の方に)
 (は投句用箋を贈呈致します)

廣 告

本誌への廣告に就きましては本社へ直接御一報下さいませれば御相談に應じます

▼御送金は郵票口徑穴版七五〇五〇番へお拂込みになるのが一番確實でありませす▼誌代受領は送本によつて御承知願ひませす▼送本封紙に前令切の印ある時は直に御送金を願ひませす▼御希望により集金郵便を差立てませすが御不在中でも預ける様に願ひませす、但集金郵便(二年分)には定價の外に手数料十錢を申し受けます▼御注文には何月號よりご御指し願ひませす▼轉居又は改名等の節は舊新併記して御通知願ひませす▼川柳雜誌に關する御用件は個人宛にしない事

昭和七年十一月廿五日印刷
 昭和七年十二月一日發行

第九卷第十二號
 (毎月一回一日發行)

編輯兼發行印刷人 麻生幸二郎
 大阪府西成區玉出本通三丁目三六番地

發行所 川柳雜誌社
 大阪府西成區玉出本通三丁目三六番地

振替大阪三二五一四番
 電話天下茶屋二五七九番
 電話天王寺一六七番

事務所 川柳雜誌社
 大阪府住吉區平野西之町八三番地

店書捌賣
 (大阪) 大賣捌 二盛社書店。(明文堂 其他市内各書店)
 (東京) 仲見世 玉森堂(神戶) 米田、寶文館(函館) 石塚
 (京都) 三宅 (松山) 弘文舎 (石川縣) マコトナ

道アラから公立社の棚へ

圓本の洪水から、本が非常に安くなつた。本は寶石などのやうに高價なるが故に尊いのではない。寶石よりも尊い本がこんなに安く買へる時代が来たことは我々讀書子にとつては有難いことだ。安い本をもつと安く讀む方法として古本を買へばいい。古本と云つても虫食本のことではない。古本が非衛生的に考へられてゐた時代は遠うの昔に過ぎてしまつた。道アラの次で、公立社の棚なのぞくことを一つの趣味としておすゝめしたい。

(路郎生)

古 本

は

高價に申し受けます。
御通知次第早速參上確實
迅速に御取引致します。

▲日本橋を南へお渡りになつたら、直ぐ南へ這入つた東側です。本店が從來の店の一軒置いて北隣へ移りました。從來の店はそのまゝ營業を續けて居りますから一層お引立の程祈上げます▼

公立社書店

大阪市南區日本橋南詰南入
電話 南 五 六 二 番

加茂川句會

日時 十二月十一日(日)午後六時
會場 仲源寺(京都四條繩手東入)
兼題「國訛」三句 路郎選
兼題「十二月」三句 翠夢選
會費 金 參 拾 錢
京都市七條大宮東入桑原方
京 都 支 部

日日柳壇募集

「花嫁」十二月四日〆切
「クリスマス」十二月十一日〆切
用紙 葉書
投句先
大阪市此花區上福島南三ノ
六六
松盛琴人宛

螢ヶ池支部句會

(日時) 十二月十一日午後一時
(所) 大阪阪急沿線刀根山病
院内
幹事 龜井 愚籠

天王寺支部句會

(日時) 十二月十二日夜
(所) 大阪市天王寺區大道三
内藤製作所
幹事 須崎 豆秋

短冊頒布

筆者 麻生路郎先生
上短冊一葉金參圓(送費不要)
作品は入金額に發送、振替
は「大阪七五〇五〇」を利用
されたし(句の希望の方は
お知らせ下さい)
大阪住吉區平野西之町
八三番地
川柳雜誌社事務所内、
短冊頒布係

懸賞川柳募集

題「鷄」 路郎選
十二月十日締切
その他雜吟を募る
▼用紙 官製ハガキ(化粧柳
壇と明記の事)
▼賞品 秀逸數句薄謝を呈す
▼投句先 麻生路郎氏宛
大阪市玉出本通三の三六

化粧新聞社

▼川柳雜誌投句用箋
本社制規の投句用箋を左の價
額でお頒ち致します。なるべ
く此用箋を御使用下さい。
五〇枚綴一冊(送料共) 銀
五〇枚綴一冊(送料共) 銀
▼御申込は本社事務所宛
(一錢切手代用不苦)

川柳手拭

路郎主幹
金拾五錢
(送料共)

清 酒

白 鶴 禮 讚

白鶴をチントンシャンと提げて来る
 午後六時白鶴が待ち妻が待ち
 百事意の如く白鶴呑んでゐる
 白鶴の機嫌へ押す子曳き出す子
 腰掛へ白鶴狭う飲むうまさ
 來意も聞かず白鶴の猪口を強ひ
 白鶴が縁こはなりぬ君ご僕
 白鶴に素直な父こなつて寝る

攝津灘

嘉納合名會社釀



大正十三年三月廿五日第三號郵部特准掛號認爲新聞紙類(每月一圓一日發行)
昭和七年十一月廿五日印刷所本館和七年十二月一日發行

川柳雜誌

(第一〇七號)

定價金三十錢

養榮の髪毛ぬせ戟刺を髓腦

伊豆椿ポマド

精の橋島大 一唯産國

輝く美髪



伊豆椿香油本舗

いさ下川愛御に直今
りあに店薬品粧化名有國全

01